平成30年度

高校生交換留学促進事業報告書

High School Student Exchange Program 2018-2019

新　し　い

自　★　分

始　ま　る

平成 31 年2月

北海道教育庁学校教育局高校教育課

Hokkaido Office of Education High School Education Division

はじめに

本事業は昭和５５年から続く北海道とアルバータ州の姉妹提携を礎として、平成６年度から実施し、今年度で２５回目となり、これまで７０校の高校から１９８名の生徒が参加しています。今年度は全道各地から１０名の高校生が参加し、それぞれ２か月間の留学を終えて、無事に事業を終了することができました。関係者の皆様方の協力により、意義のある交流となったことに心から感謝を申し上げます。

さて、本道を訪れる外国人が２７９万人を突破し、社会のグローバル化が急速に進む中、２０２０年の東京オリンピック・パラリンピックの開催を控え、これまで以上に外国人と身近に接する機会が増えていくことが予想されます。

こうした中、今年度、１０名の留学生が期待と不安を胸に抱きながらカナダへと旅立ち、様々な人々との出会いや現地の文化に触れることを通して、文化の違いや日本のよさを発見するなど、かけがえのない経験をすることができました。慣れない環境の中、英語でのコミュニケーションの場面では、意志の疎通がうまくできず、苦い経験をしたことも少なからずあったようですが、そのような苦難を自分の力で乗り越えたことにより、「新しい自分」を発見することができたものと考えております。

留学生に対するアンケートでは、多くの留学生が「この経験を職業選択や進路選択に生かしたい」と回答しており、過去に参加した生徒の中にも、本事業をきっかけに海外の大学や国内の外国語系大学へ進学した生徒がおります。

現在、日本社会においてもグローバル化が進行し、日本企業の海外進出あるいは外国企業の日本進出により、就職後も様々な場面で外国人と交流する機会が増えています。そのような中、留学を通じて異なる習慣・価値観を持つ外国人とのコミュニケーションを学ぶことは、貴重な経験であると思います。ぜひ、１０名の留学生がこの事業を契機に国内外で活躍し、本道のみならず日本を発信する担い手になることを期待しております。

最後になりますが、生活習慣の違いに戸惑い、意思疎通に御苦労されながらも、異国の若者を温かく受け入れ、愛情を持って様々な経験の機会を創ってくださったホストファミリーの皆様、業務多忙な中で御尽力いただいた高等学校の教職員の皆様に心から感謝を申し上げます。今後も本事業が、本道とアルバータ州との友好親善に寄与するとともに、本道の高校生に夢と目標を与える機会であり続けるよう努めてまいります。

平成 31 年２月

北海道教育庁学校教育局
高校教育課企画・支援担当課長　平　田　嘉　宏

■留学生一覧

	学　　校　　名	学校所在地	学年	性別
1	北海道岩見沢西高等学校	岩見沢市	2	女
	Paul Kane HS	セントアルバート市	2	女
2	北海道札幌国際情報高等学校	札幌市	2	女
	Bishop Carroll HS	カルガリー市	2	女
3	北海道千歳高等学校	千歳市	2	女
	Memorial Composite HS	ストーニー・プレイン町	2	男
4	北海道苫小牧東高等学校	苫小牧市	2	女
	Harry Ainlay HS	エドモントン市	1	女
5	北海道登別明日中等教育学校	登別市	1	女
	Paul Kane HS	セントアルバート市	3	女
6	北海道浦河高等学校	浦河町	2	女
	Harry Ainlay HS	エドモントン市	1	女
7	北海道函館中部高等学校	函館市	1	女
	Jasper Place HS	エドモントン市	2	女
8	北海道旭川北高等学校	旭川市	2	女
	Harry Ainlay HS	エドモントン市	1	女
9	北海道旭川北高等学校	旭川市	2	女
	Christ the King HS	ルドゥーク市	2	女
10	北海道鹿追高等学校	鹿追町	2	女
	Paul Kane HS	セントアルバート市	2	女

■事業実施日程

実　施　内　容	月　　日
事前研修会 （道庁別館8階　1号会議室）	平成30年7月13日（金）
アルバータ州留学生来道	8月18日（土）
アルバータ州引率教員による受入学校訪問	8月20日(月）～24日(金)
アルバータ州留学生離道	10月20日（土）
本道留学生出発	11月4日（日）
本道引率教員による受入学校訪問	11月6日（火）～8日（木）
本道留学生帰国	平成31年1月6日（日）

1　生徒編

思い出の４ヶ月

北海道岩見沢西高等学校　２年

【きっかけ】

以前から海外留学に行ってみたいという憧れがあり、両親も勧めてくれたので応募しました。もともと自分に英語力がなく不安もありましたが、「挑戦することが大切だよ！」と背中を押してくれました。書類審査や面接が終わって、合格を聞いたときはまさか自分が受かるなんて思ってもいなかったので、とても嬉しかったです。

【受け入れ】

空港へパートナーを迎えに行った時はいよいよ始まるんだ！とドキドキとワクワクでいっぱいでした。以前からメールやビデオ通話でやりとりはしていましたが、会うのはこの日が初めてです。最初に喋った時は、緊張しているのかあまり喋ってくれなくて静かな子でした。ですが、会話をしていくうちに日に日に喋るようになってくれて嬉しかったです。学校ではとても仲のいい友達ができて楽しそうでした。

ですが、私のパートナーは少し気分差があったり、携帯に依存していたり、考え方が合わず苦労することもありました。そんな時は適度な距離で接することを心がけました。今考えれば、自分とタイプの違う人とうまく付き合っていくいい経験になったと思います。

週末は、札幌や小樽など色々な所へ行きました。特に、二泊三日の東京旅行は日本の大都市を見ることができてとても楽しかったようです。

【カナダへ】

いよいよ私がカナダへ行く日になりました。初めての留学でとにかくドキドキでした。カナダに行く途中、急遽成田空港でみんなと一泊しました。その一泊でみんなとの絆も深まりとても楽しかったです。カナダに着いてパートナーとホストファミリーに会った時はホッとしました。

次の日から学校が始まり、どんな雰囲気なのかとてもワクワクでした。そこでカルチャーショックが！私は周りのみんなが話しかけてくれると思っていましたが、ほとんどの人が話しかけてくれませんでした。これには少し落ち込みました笑。カナダはたくさんの人種の人がいるので、日本人がいても珍しいことではないのです。カナダ人の他にもフィリピン人や中国人などアジア系の人達、アフリカ系の人達もたくさんいました。そんな中でみんなが楽しく学校生活を送っているのを見て、色々な人種の人達をお互いに認め合う素晴らしい国だと思いました。フィリピン人の友達に「どうやって英語を喋れるようになったの？」と聞いたら、「たくさん勉強した！」と言っていました。みんな努力して異国での生活を送っているのだなと感じ、私も頑張ろうと思いました。

学校は日本と違ってとにかく自由でした。自分の受けたい授業を選ぶことができ、授業中は自由

に発言できます。また、Cosmetology、Yoga など日本にない授業があったり、どの授業もアクティブで楽しかったです。それに、携帯を使うことや飲食も許されていて、生徒達はメイクをしたり髪を染めたりととても個性豊かです。Japanese の授業では、日本の学校とカナダの学校の違いをみんなで話し合ったりしました。日本の学校の厳しさにみんなびっくりしていました。日本もカナダのようにもう少し自由さがあればいいのになと思いました。放課後は、水泳部やダンス部に行ったり、Tim Hortons という日本で言えばマックのような所によく友達と行ったりしました。

休みの日はよく West Edmonton Mall に行きました。北米最大というだけあってショッピングストアがたくさん入っていて、プールや遊園地やスケートリンクまでありました。私は１０回以上行きましたが、それでも全部回りきることができないくらい大きいです笑。本場のアイスホッケーの試合も見に行くことができ、とても感動しました。

クリスマスはビッグイベントでした。前日には友達の家でパーティーをやりました。そして当日、朝起きるとツリーの下には信じられないくらいたくさんのプレゼントがあり家族みんなで開けました。ディナーは大きいターキーを食べ、朝から幸せな一日でした。

年越しは日本のように盛大にやらないと聞いていましたが、ニューイヤーズパーティーをしてとても楽しかったです。このようなパーティーなども通して、色んな人と出会って友達を作ることができたのでとてもいい思い出になりました。

【日本の素晴らしさ】

カナダで過ごしていく中で、日本の良さも再発見できました。それは相手への気遣いです。外国の人達は相手よりも、まず自分を第一に考えている人が多いなと感じました。相手を思いやったり、察するという気遣いは日本の大切な習慣だと思います。

また、日本に行ってみたいと言う人達もたくさんいて、「アニメがすごい！」「寿司食べたい！」と言ってくれる人や、「これ日本語で何て言うの？」など興味を持ってくれる人もいました。改めて日本は素晴らしい国だと実感しました。

【最後に】

この留学を通して英語はもちろん、たくさんの人と出会いたくさんのことを学びました。楽しかったことも大変だったことも全てが貴重な経験でした。この経験を自分の将来に繋げていきたいです。両親や先生方や友達、周りの人達の支えに感謝します。本当にありがとうございました。

４ヶ月間のすばらしい思い出と経験

北海道札幌国際情報高等学校　２年

『きっかけ』

もともと高校三年間のうちで一度は留学がしたいと思っていて、そして同じ部活の先輩が前年度に参加していたことで、このプログラムについて知りました。私は国際文化科にいながら全く自分の英語力に自信がなく、勇気もない。そんな自分の性格を変えるために、もちろん英語力も高め、また今まで挑戦したことのないことに挑戦し自信と勇気を持ちたいという思いで参加を決意しました。

『日本での生活』

パートナーであるペイジを新千歳空港で待っているときは不安と緊張のなんとも言えない感情でした。食事は何を普段食べているのか、何が食べたいのかがわからず最初は大変でした。ですが時間が経つにつれ、家族とも打ち解けていきよく普通に会話をしていました。藻岩山の夜景、親の友人宅でBBQ、一泊二日の温泉、着物などたくさんのことを一緒にしました。ペイジにとっては初めてのことばかりで全てが新鮮だったのでは、と思います。私にとっても改めて日本の文化などを共有することができ、カナダとの違いや、自分たちでは気付けなかった習慣など、たくさんのことを学べました。当時私の学年にはペイジを含め３人の留学生がいました。その子達とも非常に仲良くなり、頻繁に遊びに行っていました。クラスの子達とも打ち解けて、お別れの際には涙を流していました。２ヶ月という長いようで短いこの期間はあっという間に終わりを迎えました。

『カナダでの生活』

私が行ったビショップキャロル高校はカナダでも特別な高校でした。全て自学自習でクラスもなかったです。なので学習の進捗状況などは全て自分次第で、３年経たずに全て終わらせてしまう優秀な子もいれば、３年で終わらず４年目もいなければいけない子もいると聞きました。私は体育、合唱、宗教、技術、スペイン語を取り、JLCC（Japanese Language Culture Club）に入り、吹奏楽にも所属しました。吹奏楽ではクリスマスコンサートに出させてもらい、とても良い思い出になりました。

自学自習なのでペイジはいるけれど別行動の時間が多かったです。また、定まったクラスというのがないので最初は友達を作るのが大変でした。アーチェリーをした日は、午後全部がその授業だったので、喋れる友達がいないと辛いな楽しくないなと思い、勇気を出して見ず知らずの女の子に声をかけました。あのときのことは今でも覚えています。でもそのおかげでたくさん会話ができ、コツを教えてもらったり、最初の不安とは裏腹にとっても楽しい時間になりました。学校生活は非常に充実したものとなり、友達もたくさんできました。

クリスマスにはおばあちゃんたちがいる、隣のサスカチュワン州にいきました。とても田舎で平地がどこまでも広がっていましたが、スノーモービルをしたり、プレゼント交換をしたり、今まで見たことのないような綺麗な星空を見られたり、貴重な体験をたくさんできました。

『最後に』

　この２ヶ月は私を、また私の中の自分を大きく変えました。辛かったこと、大変だったこと、今では頑張ったと自信をもっていうことができます。また、これまで以上に周りを観られるようになり視野も広がりました。そして今回学んだことのひとつに、自分次第で悪い方にも良い方にもいくらでも変わる、ということがあります。そしてそれはどの場面でもいうことができました。たったの２ヶ月。最初の２週間は辛くて寂しくて居場所がない感じがして、毎日帰りたいと思っていました。パートナーとのすれ違いも多々ありました。そんなときには、もう一度自分が何のためにここにきているのか、ということを考え、逃げずに一つひとつ向き合っていきました。２時間くらいパートナーと話しあったり、時には日本の家族や友人に励まされたり。そんな風にして困難を乗り越えたことが私に自信を与え、家族の優しさを気づかせてくれました。このようなすばらしい機会を与えてくれた家族、支えてくれた先生方、この留学に関わっていただいた関係者の皆様、２ヶ月間本当の家族のように受け入れてくれたホストファミリー、そしてパートナーのペイジ、全ての皆様にこの場を借りて感謝を申し上げたいと思います。かけがえのない素晴らしい留学となりました。本当にありがとうございました。

人生で一度の４か月間

北海道千歳高等学校　２年

〈きっかけ〉

私は中学生の頃から「いつか留学をしたい！」という夢をもっていました。しかし、自分にはまだ十分な英語力がないので早すぎると感じ、大学生にならないとチャンスは来ないのではないかと考えていました。そんな時、千歳高校ではこの交換留学プログラムに参加していることを教えてもらい、入学して応募することを決めました。

〈準備期間〉

留学が決まってから、私はパートナーのリアムとラインを使ってたくさん連絡を取りました。最初はお互いの好きなものや趣味について質問しあいました。お互い恥ずかしく、言葉もわからない状態で始まりましたが、だんだんとコミュニケーションを取ることができるようになり、２か月たった頃には、実際にテレビ電話で英語を使って会話を楽しめるようになりました。

〈リアムとの日本での生活〉

リアムはとても日本語が上手でした。日本に来て最初の頃はコミュニケーションに少し困っていましたが、すぐに喋れるようになりました。放課後は、私は部活があったため、あまり一緒にいられませんでした。最初の頃は学校生活に疲れて帰宅後に昼寝をしていたそうです。１か月する頃には、他のクラスの男子生徒と一緒にお昼ご飯を食べたり、遊んだり、そして私の母と夕食を一緒に作って楽しんでいました。更に、大学生の私の兄と母親の親戚に会うため、フェリーを使って４日間東北にも行くことができました。日本文化を感じるために旅館に泊まり、寺や神社巡りをしました。帰国する前日は、クラスメイトと昼休みにお別れパーティーをしました。クラスメイトからメッセージつきのお菓子をたくさんもらいうれしそうにしていました。

〈カナダでの生活〉

リアムが通うメモリアルコンポジット高校は全校生徒が約１，０００人の学校でした。私の通う高校と全校生徒数はあまり変わりませんが、雰囲気が全く違いました。校舎は一階建てで、８４分授業が４コマでした。私は JAPANESES、SOCIAL、FOOD、ENGLISH の授業を受けました。最初の頃、JAPANESES は日本に興味がある人たちがいたので何人か話しかけてくれました。一方、SOCIAL、FOOD、ENGLISH の授業を受けている人たちは、私に全く興味がなかったようで、一人でいることが多く、正直とても辛かったです。しかし、勇気をもって話しかけ、言語の壁を感じながらも同じ趣味をもつ女の子と仲良くなれました。少しずつコミュニケーションを取れていく自分に自信ができました。この経験から、「自分から何かをしなければ、何も始まらない！」と感じ、自分から遊びに誘い、その女の子と遊ぶようになりました。遊んでいる中で、その女の子の友達たちも仲良くなり、楽しく過ごすことができました。私にとってとても大事な友達になりました。今年の１０月にはメモリアルコンポジット高校で主催している２週間の交換留学で北海道に来る予

定なので、会うことがとても楽しみです。学校以外では、リアムの家族と片道４時間もかかるジャスパーという自然公園へ観光に行きました。日本とは景色が違い、とにかく山が大きく、大きなシカなど野生の動物たちとも会うことができ、カナダの大自然を感じることができました。また、ＮＨＬアイスホッケーの試合を観戦に行かせてもらいました。私はアイスホッケーを小学校の頃にしていたので、本場の試合を見ることができて本当にうれしかったです。その試合の中でゴールが決まると、チャリティーのために一斉にぬいぐるみをリンクへ投げるイベントがありました。私もうさぎのぬいぐるみを投げ込みました。その光景が一番の思い出になりました。

〈カナダで感じた文化の違い〉

カナダで感じたことはたくさんありました。１つ目は普段の会話です。「良い１日を！」や「気を付けてね！」、家族の時は「愛しているよ！」など何気ない会話の最後に言っていることです。日本でも言わないことはないと思いますが、毎日のように言っていたので新鮮でした。２つ目は、学校の昼食時間です。日本では机で食べるのが普通だと思いますが、カナダではみんな廊下に座って食べていました。日本のように自分のホームルーム教室がないからだと思いました。トイレの前で食べていたことは本当に驚きました。３つ目は、宗教の違いです。友達の家に遊びに行ったとき、夕食をいただきました。食べ始めは、日本でいう「いただきます」のようなお祈りがありました。食べている間はテーブルの中央に数本のろうそくをつけて照らし、食べ終わった時にそのろうそくを消していました。最初はびっくりしましたが、実際に宗教の違いを感じることができてよかったです。

〈最後に〉

今回この交換留学プログラムに参加したことは本当に自分のためになったと思います。特に私の考え方が「自分のやりたいことをやればいい！他人がどう思うかは別問題だ！」と思うようになり、自分に自信が持てるようになりました。

高校生のうちにこのような貴重な経験をさせてくれた家族、学校の先生、このプログラムの主催した北海道教育委員会の皆様、そしてホストファミリーに感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

アルバータ州交換留学を通して学んだこと

北海道苫小牧東高等学校　２年

１．応募～受け入れ

今回、私は初めて交換留学というものに応募、参加しました。４か月もうまくやっていけるか、留学中の日本の勉強はどうしよう、と不安で応募を最後まで悩んでいましたが両親と友達から背中を押してもらい、勇気を出して応募することができました。担当の先生に応募を申し出た時点で期限ギリギリだったので、土日の２日間しかない中で小論文や出願書類などを書くのは大変でしたが、良い経験になったと思います。

しばらくたった後、学校に呼ばれ先生から紙を貰った時、そこに「合格おめでとうございます」という文字が見えて本当に嬉しかったです。

そこからは事前研修会に行ったり、パートナー迎え入れのための準備に追われたりであっという間に時間が過ぎていきました。

２．日本での生活

空港でパートナーのゾーイを迎え、日本での２か月間が始まりました。

ゾーイの学校初日は、ちょうど２日間の夏季体育大会の日でした。私は事前に友達と皆でおそろいのメガホンを作っていたので、プレゼントすると喜んでくれました。

学校以外では自然の中で動く事と野球観戦が好きだと言っていたので支笏湖サイクリングや樽前山登山、ファイターズの試合観戦に行きました。

エドモントンは内陸で海が無いそうなので港や船の大きさにとても驚き喜んでくれ、嬉しかったです。

その他にも登別や水族館などに行きました。また、帰国直前には修学旅行に行きましたが私もゾーイも先生方や友達からサポートをしていただき、とても有意義なものになりました。

また、お寿司やうどんを始め沢山の日本食にも挑戦していました。

私が印象に残っていることは二人でピアノの連弾をした時です。日本では「ドレミ」と音階を読みますが、カナダでは「CDF」と読むので教える事が難しかったです。普段すごく簡単なことでも言葉を変えて伝えることの難しさを実感しました。

ただ、ゾーイと私の間では趣味などの共通点がない上に言葉の壁もあったのでコミュニケーションやお互いの理解に苦しみました。二人で何度も話し合ったのに伝わらない思いに、心身共に疲れ気味になったこともありましたが、こういう風に試行錯誤することも異文化交流の素晴らしさなんだなと感じました。

３．カナダでの生活

期待と不安で溢れるカナダ生活は、私の想像以上に充実した生活になりました。

まず、私はHarry Ainlay High Schoolというエドモントンにあるとても大きい公立高校に通いました。

授業はESL（English as a Second Language）、Gym（体育）、Computer Technology（画像、動画編集）、Art(美術)、Drama（演劇）、Japanese（日本語）、Food（調理実習）の７教科を選択しました。どれも私にはとても刺激的で楽しく、中々日本では見られない授業なので興味深かったです。放課後にはダンスに行ったり、友達と学校近くのモールに行ったりしました。

そしてHarry Ainlayには沢山の人種、そして宗教の人達、LGBTの人たちがいて授業中や休み時間に日本で私達がテレビの話をするように友達と当たり前に国際問題や色々な問題について意見を交換し合っていました。さらに私は生徒たちがお互いを褒め合い高め合っている所にこの学校の素晴らしさを感じました。学校以外では、友達とWest Edmonton MallやDowntownにあるカフェに行ったりしました。

ホストファミリーは演奏会や植物園、バンフなど様々な場所に連れて行ってくれました。中でもバンフのレイクルイーズは思わず息を飲むような綺麗さで寒さも忘れて感動してしまいました。

パートナーのゾーイとは一緒にクッキーや日本食を作ったり散歩に行ったりしました。

特に散歩に行った時はよく自分の価値観や考え方などを英語で話しました。私の英語の練習にもなるし、ゾーイの新しい一面も知ることができてうれしかったです。

４．最後に

私は今回、交換留学を通して様々なことを学び、成長することができました。

特に諦めないこと、勇気を持つことの大切さを学びました。

辛い時もありましたが、諦めずに勇気を持って行動したからこそ辛い出来事が自分を成長させてくれました。

カナダと日本では、住む環境も違えば話す言語も違います。きっとこのプログラムに応募していなかったら出会うことのない人達、場所、体験だったと思います。

このかけがえのない４か月間、１人ではなく家族や友達を始め、沢山の周りの人に支えられ過ごすことができました。お世話になった方々に感謝の気持ちを忘れず、次は私が困っていたり悩んでいたりする人の背中を世界に向かって押してあげられるような人になるために、この交換留学で学んだことを生かしてこれからの残りの学校生活に取り組んでいきたいです。

アルバータ交換留学を終えて

北海道登別明日中等教育学校　１年

【留学のきっかけ】

私の通う学校は海外研修や留学に挑戦している生徒が多くいて、その生徒たちの海外での体験を聞き、留学に興味を持ちました。また、私は将来英語を使った職業に就きたいと考えていたので、英語のスキルアップの為にも留学に挑戦しようと思いました。

【日本での生活】

私のパートナーの Amelia は「海外高校生による日本語スピーチコンテスト」というプログラムに参加していたため、７月末頃から本州にいました。そのため、他のカナダから来る留学生メンバーが北海道に来る飛行機の時間とは別の時間帯に空港で会うことになりました。Amelia とはパートナーが正式に決まった時から SNS でやり取りはしていたのですが、会う前はとても緊張しました。Amelia は最初の頃すごくおとなしくて仲良くなれるか不安でしたが、日本の生活や学校に慣れてくるにつれて、自分の家族の話やカナダについてたくさんの事を教えてくれました。Amelia は絵を描くことがとても得意で、日本での思い出を絵に描く為に神社の鳥居や木、花の写真をよく撮っていました。学校では、美術部に参加して学年を問わずたくさんの友達を作っていました。学校登校最終日はクラスでお別れパーティーとサプライズを企画していて、Amelia は泣きながら喜んでくれました。Amelia もクラス全員に似顔絵とメッセージカードを一人ずつ用意していて、２か月間がとても良いものになったことがうかがえました。家族とは、洞爺湖温泉や登別の足湯、地球岬など様々な場所に一緒に行きました。地球岬には、Amelia にプレゼントした浴衣を着ていきました。また、Amelia は動物が大好きだったので登別クマ牧場で熊に餌をあげたことと水族館でペンギンの行進を見たことが、特に印象に残っているようでした。２か月間は楽しくて有意義なものになりましたが、大変なことも少しありました。中でも一番困ったことは、ごはんです。Amelia は日本食を全くと言っていいほど食べませんでした。日本食以外でもカナダで食べたことのあるものしか食べようとしなく、嫌いなものはほとんど食べないまま残すことも多々ありました。そのため、２か月間は Amelia の食べられるものだけを作るようにしていました。私がカナダに行った時も、ホストファミリーは食べ物を残すことに対して何も感じていないようでした。食べ物を大切にする感覚は世界共通ではないということを感じました。

【カナダの学校】

私の通っていたポールケイン高校は全校生徒１０００人程の学校でした。私はヨガ、美術、日本語、体育、裁縫、ESL（英語が第二言語である生徒のための英語）の５科目の授業を受けていまし

た。体育の授業では、バスケットボールや水泳をしました。また月に何度か、学校に設置されているスポーツジムで体を鍛える授業もありました。日本の学校のように校則は厳しくなく、髪色や服装も一人ひとりの個性として受け入られていました。授業科目も国語や数学等の教科はもちろんのこと、美術や軽音、美容等の専門的な科目までありました。そのため、生徒は自分の本当に学びたいことを学ぶことができているように感じました。学校が午後２時半に終わるので、放課後に友達とショッピングモールやプールに行って楽しい２か月間を過ごしました。

【ホストファミリーとの生活】

Amelia には３人の弟がいて、家の中は常に賑やかでした。弟たちと Amelia はゲームが大好きで夜はカードゲームやビデオゲームをして遊びました。また、ホストマザーは手芸が得意だったのでぬいぐるみの作り方を教えてくれて、学校の無い日は一緒に手芸をしました。一番思い出に残っているのは、車で７時間程運転をしてバンフ国立公園に連れて行ってくれたことです。ロッキー山脈は日本にある山脈とはスケールの大きさがくらべものにならないくらい大きかったです。他にも、あまりの寒さで凍った湖や、幻想的な景色を見ることもできました。私が日本に帰る日には、家族全員が手紙をくれてとても優しい家族でした。

【最後に】

今回の交換留学で私は、英語はもちろんのこと、ＬＧＢＴのことや習慣の違い、海外で２か月暮らすことで日本の良さも学ぶことができました。言語の違うパートナーと４か月間ともに生活するのは想像以上に大変で辛いと感じることもありましたが、今振り返ると Amelia とパートナーになることができて良かったと思います。この経験を生かして、今後も海外研修などに積極的に参加していきたいです。４か月間支えてくれた家族や先生、友達、そして Amelia には心から感謝しています。忘れられない留学になりました。またいつかアルバータに行こうと思っています。本当にありがとうございました。

私を変えた交換留学

北海道浦河高等学校　２年

「星がきれい」。９月６日の地震直後にメーガンが言った言葉です。
生まれて初めて経験した地震で停電になり、不安なのではと思いましたが、彼女はブラックアウトでさらに光り輝く星に目を奪われていたようで、物は考えようだなと感じた出来ごとでした。

【日本での生活】
私の住んでいる町はとても小さく学校も小規模なので、パートナーに充実した留学生活を送ってもらえるか不安でしたが、先生やクラスの人、他学年の人にもとても親切に接して頂いて、楽しい時間を過ごしてもらうことができました。週末に遠出をしたり、夜に二人で話したり、日本のドラマを英語字幕で見たりたくさんいい思い出を作ることができました。そしてメーガンとの日本での二ヶ月間は本当にあっという間でした。
一つ心がけたことは、何かあったら直接パートナーと話すことです。パートナーの様子が変わった時には、すぐに話を聞くようにしました。慣れない環境で生活していて、なかなか言いだせない事もあったようです。話しを聞いてあげると、お互いに気持ちがすっきりして、さらに理解し合えるようになった気がします。

【カナダでの学校生活】
メーガンが帰国して、今度は私がカナダに行く番になりました。
ただ、メーガンとは話せてもたくさんの人がいる中で自分の英語が相手に伝わるのか、パートナーの助け無しに一人で授業に行けるのか、ホストファミリーとうまくやっていけるのかなど、たくさんの不安がありました。
カナダに到着して次の日から学校が始まりました。一番驚いたのは、人が多い！ということです。私の行ったハリー・エインリー高校は約２５００人もの生徒が通っているらしく毎日初めて見る人がたくさんいました。
授業の種類は数学や社会といった日本と同じ科目の他に、車の修理、ファッション、メイク、演劇など初めて聴く授業もたくさんあって私は英語、演劇、体育、スペイン語、写真の授業を選択しました。最初の一週間は緊張してなかなか同じクラスの人に話しかけることができず、特にスペイン語のクラスでは、英語とスペイン語が混ざっていて初めてスペイン語を聞いた私は授業のほとんどを理解できませんでしたが、どの授業でも必ず誰かが助けてくれました。親切な人が多かったです。
そして、カナダは想像以上に世界中から移住している人が多く、様々な国から来た人と友だちになりました。

【ホストファミリーとの生活】
カナダに着いてすぐ、心配していたホストファミリーへの不安がなくなりました。家族の皆さん

はとても親切で、私が快適に過ごせるように部屋には必要な物を調え、困っていることはないかいつも気にかけてくれました。また、休みの日には本当にたくさんの事を経験させてくれました。最後の二週間のお休みは、特に家族と一緒に過ごす時間が多く、クリスマスやニューイヤーなど日本とは全然違い、楽しかったです。ホストファミリーの家庭では、５日間ほどクリスマスのイベントが続き、親せきや友人たちとごちそうを食べ、ゲームをして楽しく過ごしました。

連休には、カルガリーやバンフへ旅行に連れて行ってもらいました。初めて見るカナディアンロッキーは圧巻でした！

また、ほとんどの週末に、パートナーの弟や妹のアイスホッケーの試合を見に行きました。プロの試合とはまた違って小さくてとてもかわいらしかったです。

【学んだこと】

留学する前は、英語を学ぶことがメインだと思っていましたが、行ってみると、実際は英語よりも自分にとって大きな影響を与えることが色々ありました。

カナダの多文化主義による日本との考え方の違いや、様々な国の人々が共に暮らすためにはどうしたらいいのかを考えさせられることが多くありました。

４ヶ月前の自分はもっと自信が無く、特に英語を話す時は間違えないようにとあまり積極的に話しかけられませんでした。ですが、日本での二ヶ月間、メーガンと多少間違っていてもたくさん英語で話した事や、カナダに行き自分の思いを伝える事によって、前よりも自信がつきました。

そして、一番大きく変わった事は、英語を学ぶだけでなく、英語を使って何かを学びたいと思うようになった事です。

ある日、私が出会った友だちと将来について話したことがありました。彼はとても努力家で、自分の夢を叶えるためにゲームも止め、時間を大切にしています。たくさん勉強をして、医療を十分に受けられない人のためにアフリカで医者として働きたいと語ってくれました。私はこの話を聞いて、「自分と同じ年なのに、こんなに夢に向かって一生懸命になれる人がいるんだ！」と衝撃を受けました。

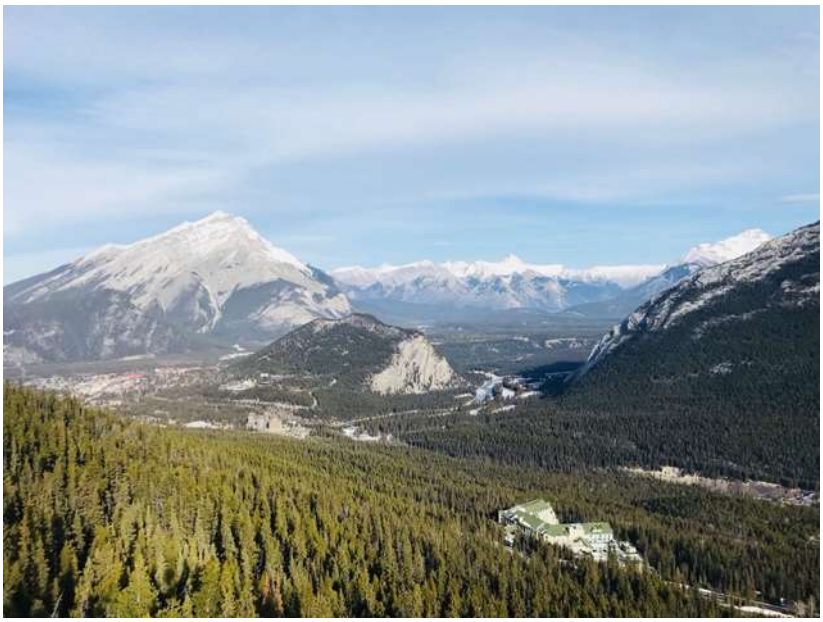
【最後に】

このプログラムに参加するにあたって、家族や先生など本当にたくさんの人に協力して頂きました。その事に感謝して、これからの学校生活や自分の進路実現につなげていこうと考えています。カナダでできた友だちの中には、３カ国語や５カ国語話せるという人がたくさんいたり、自分の将来の夢を叶えるために二つの大学にいこうと具体的に決めている人もいました。私もそんな風に自分の夢に向かって頑張ろうと思います。

カナダで自分の夢を話してくれた友だちに、「私は、世界中の学校に通えない子どもたちのために、

力になりたい」と伝えました。

　夢の実現には、難しいこともあると思いますが、なるべく物事をポジティブに捉え、前に進んでいこうと思います。「物は考えよう」という言葉を思い出しながら。



留学体験記

北海道函館中部高等学校１年

パートナーのサブリナを日本で受け入れた二ヶ月間、そしてカナダで、ホストファミリーや友達と過ごした二ヶ月間は貴重で、なおかつ充実したとても良い期間になりました。ここでは、私の学校生活について主に伝えていきたいと思います。

まず、私が学校に行って驚いたことは校舎の大きさです。私が通ったジャスパープレイス高校は約 2700 人が通う、いわゆるマンモス高でした。しかしその分、多くの授業科目・部活動があったり、さまざまな国から来た人達がいたりと、新し物好きな私にとっては英語を学ぶ上で、とても良い環境でした。

私は一・二時間目に ESL、三時間目に Cosmetology、四時間目に Foods の授業を受けました。ESL というのは、English Second Language の略称で、英語を第二言語として学ぶ人達の為の授業です。クラスは、日本、中国、フィリピン、トルコ、ベトナムなど世界各国から来た 30 人近くの生徒で構成されていました。生徒たちはみんな大体私と同じくらいの年齢で、カナダに来てまだ一年も経ってない人達が大半だったと記憶しているのですが、明らかにスピーキング力の高い生徒ばかりでした。発音が良くない、ライティングが出来ないなどそれぞれ苦手な部分はありましたが、何よりも「伝えたいことは何としてでも伝える」という意気込みや「間違いを気にせずに話す勇気」が大切だと思いました。そして、そのような環境が私の学習欲をさらに掻き立ててくれたのです。

一方、Cosmetology や Foods の授業では、先生や友達がどんな文法を使って話しているのかなど英語だけに集中することはできなかったものの、グループワークが多かったので、自然と友達作りができる良い機会になっていました。特に、Cosmetology の授業でできた友達とは、休日に一緒に学校の近くのモールに遊びに行ったり、私の誕生日にサプライズでケーキとプレゼントを用意してくれたりと、本当に充実した濃い思い出をつくることができました。

放課後は、前から興味のあった海外での部活動に参加しました。参加するためにはトライアウトという実技試験に合格する必要があり、私がトライアウトを受けたバスケ部は、全部で 25 人程の入部希望者がいる人気の部活でした。トライアウトは全部で３回あり、最後には約 12 人程度が選ばれるという仕組みです。バスケの基本動作のパス、シュートの動きや、ゲームをしているところを見ながらコーチが選んでいたのですが、私はなんとか最後まで残り、無事チームの一員となることが出来ました。バスケ部のメンバーとして、練習試合だけではなく大会に出場したり、カルガリーへの遠征に参加したりと、学校生活をただ単に

送っているだけでは体験できなかったようなことをたくさん体験しました。また、チーム内の仲間たちがとても良い人達で、一緒にクリスマスパーティーを開いたり、学校内で会った時にお互いに挨拶しあう仲になったりと、友達作りの幅も広がりました。もし「日本でやっている部活動が心配だけど留学も行ってみたい！」と考えている人は迷わずに留学し、部活動に参加してより多く英語を話す機会をつくっていくべきだと思います。

私は結果的に大きなトラブルも無く、部活動にも参加でき、楽しい学校生活を送らせてもらったのですが、一つだけ出来なかったことがあります。それはカナダの学校の日本語の授業に参加することです。カナダに行く前から、授業に参加して先生の役割をしたり、日本のことを紹介したいな、などといろいろ考えてはいたのですが、なかなか都合がつかず、参加することが出来ませんでした。

しかし幸運なことに、私は日本に興味を持っている友達をたくさんつくることが出来ました。私が１人で廊下を歩いていたときに、「こんにちは。あなたは日本人ですか？」と日本語で話しかけてきてくれた人、部活動で会って日本人だということを伝えたら日本に興味を持ち始めてくれた人、日本語は全く話せないけど日本食が大好きでいつか日本に行ってみたいと考えている人。一人一人出会ったきっかけは違うけれど、みんな日本が好きで、日本に興味を持ってくれている人達でした。

もしも私がこのプログラムでカナダに来ることを決めていなかったら出会うことが出来なかった人達なのかもしれないと考えると、自分は本当に貴重な経験をさせてもらえたのだと感謝の気持ちでいっぱいです。

このプログラムに参加させてくださった道教委の方々を始め、出入国の手助けをしてくださった引率の先生、パートナーが日本に来た際に時間割や日本語指導などで助けてくださった函館中部高校の先生方、このプログラムに参加することを許可し支えてくれた両親、そしてカナダで暖かく迎えてくれて、毎日の送り迎えや先生達との連絡のやり取り、おいしいご飯と綺麗な部屋の提供をしてくれたホストファミリー、この他多くの方々にお世話になりました。みなさんの温かいご支援に感謝します。ありがとうございました。

留学報告書

北海道旭川北高等学校　２年（Harry Ainlay HS）

１１月６日の正午ごろに旭川を出発し、成田空港に到着しました。そこでたくさんの事件がありました。はじめに、私と別の留学生の子の飛行機の座席がありませんでした。そして引率の先生のeTA がうまく申請できず、その日はカナダに飛び立つことができませんでした。みんな２０kg 以上もあるスーツケースを２つ持って、電車に乗り込みカプセルホテルに向かいました。カナダに行くのが遅くなってしまったのは残念でしたが、まだあまり留学メンバーのことを知らなかったので、実はとても有意義な時間を過ごしました。まるで修学旅行のような雰囲気でした。

次の日の夜にようやく日本を離れることになりました。Amie はウェルカムボードをくれました。弟はパンダのクッションをくれました。もらえると思っていなかったのでとっても嬉しかったです。お父さんはイタリア人、お母さんはパキスタン人だったので日本とは全く別の文化を持っていました。お母さんはとてもきれい好きな国柄なので、毎日のように掃除をしなさいと言っていました。そのため家はすごくきれいでした。

カナダに行った次の日からすぐに学校が始まりました。３日目に英語のテストを受けました。ＥＳＬという英語のクラス分けのためのテストであり、レベル３のクラスに入ることになりました。初めての体育の授業のときには、お財布の中身を盗まれました。その日は友達と遊びに行く予定だったので３０００円くらい入っていたので全部盗まれてしまいショックであると同時に、日本は治安が良い国なのだと改めて実感しました。

１週間ほどですぐに連休があり、ジャスパーという大きな公園に連れて行ってもらいました。車で３時間以上かかったのでとても疲れましが、日本では見ることができない山や湖がすごくきれいな場所でした。また、夏の方がもっときれいだとホストファミリーが言っていたのでいつかまた行ってみたいです。ジャスパーで泊まったホテルの隣にたまたま同じ学校から来た留学生とそのパートナー達が泊まっていて、夜に久しぶりに一緒に遊ぶことができました。そこに行った帰りに初めてカナダ発祥のファーストフード店に行きました。日本にあるミスドのような感じで、安くてとってもおいしかったです。

その連休が終わり、長い学校生活が始まりました。日本とは違い授業は全て選択授業でした。私は、英語と数学と、体育と家庭科と演劇の授業を取りました。数学の授業内容自体は日本より簡単でしたが、授業はもちろん英語で行われたので、ついていくのが大変でした。ＥＳＬの授業を受けてびっくりしたのは、みんな簡単に英語は話せるのに文法が全然できなくて、文法の授業のでは中１で習ったようなことをやりました。文法以外は旭川北高でやっているＡＬＴの授業とほとんど変

わらず、エッセイを書いたり、お互いの意見を交換したりしました。体育の授業では、日本にはないアイスホッケーの授業があることに驚きました。

ブラックフライデーに、北米最大のモールに行きました。食べ物以外の物が半額以下になっており、いろんなものをたくさん買ってしまいました。そのモールには遊園地とプールも付いていて、とっても大きくてびっくりしました。ホストファミリーに遊園地もプールも両方連れて行ってもえてどちらもとても楽しかったです。そして日本にいたときから、ずっと食べたかったビーバーテイルを食べにも行きました。いろいろな味があってとてもおいしかったです。

クリスマス前にカナダの友達とお泊まり会をしたりして楽しい日々を送っていました。クリスマス休暇に入ると、毎日のように親戚や友達が家に来て、いつもパーティーみたいでした。そしてギャンブルに近いイタリア伝統のゲームをしました。最初はルールが全然わからなくて、苦労したけれどルールが分かるととても単純で面白かったです。クリスマス当日にはサンタさんからたくさんのプレゼントが届けられていました。クリスマス文化がしっかりあるのでプレゼントの量がすごかったです。お正月にはお姉ちゃんとエイミーの幼馴染が家に来て、たくさんのゲームをしました。そして７時ころに花火を見に行きました。スケールが大きいと感じました。

２ヶ月間、エイミー家族や学校の友達にとてもよくしてもらい忘れられない一生の思い出になりました。一方、自分の思っていた以上に英語が伝わらず悔しい思いをすることも多く、単語だけになってしまうこともたくさんありました。ときにはその単語すら言えず、簡単なことも伝えられない悔しさもたくさん経験しました。単語を勉強するのは大変ですがもっと一生懸命に勉強しないと自分の気持ちをすぐに伝えられないことを痛感しました。このように現地に行ってみないと感じられないことを体験でき、良い経験になりました。それと同時に、このプログラムに参加できたのは自分の力だけではないので支えてくれた方たちへの感謝も忘れてはいけないと感じました。

留学報告書

北海道旭川北高等学校　２年（Christ the King HS）

私は海外に行った経験がなく、しかも留学先に日本人が誰もいないので、留学にいく日は本当に緊張しました。空港で親と別れるときは恥ずかしかったので一言「じゃあね」といったものの、心の中は緊張で言葉では言い表せないくらい寂しかったのを覚えています。でも親と別れて成田行きの飛行機に乗る時には、ほかの留学生とうちとけて緊張もほぐれてきました。そして成田に着き、バンクーバー行きの飛行機の乗る時事件が起こりました。引率の先生の Electronic Travel Authority がうまく申請されてなくて私たちは飛行機に乗ることができず、１日出発が遅れてしまったのです。その日は１１人でカプセルホテルに泊まることになり、最初は「ついてないな」と思っていましたが、一晩みんなで過ごすことによって、ほかの留学生のことを知ることができてこの２ヶ月間支えあえる結果になったので、１日遅れてほんとによかったと思っています。

次の日は無事に飛行機も飛び、いよいよ日本を離れることになるのでドキドキしました。成田からカナダのバンクーバーまでは９時間かかり、飛行機の中で寝るのが難しいのがわかりました。そのあとも２回乗りついで飛行機に乗っていただけなのにありえないほど疲れていました。空港でパートナーと再会できた時は本当にうれしくて今までの疲れが消えてしまいました。

生活も落ち着いてきたころに、１週間にわたるカナダ旅行を計画してくれていて Jasper、Banff、Calgary という町を毎日４時間かけて車で回りました。車の中では飽きないように音楽や食べ物を用意してくれて、４時間を楽しく快適に過ごしました。大きく鋭い山や長い間溶けてない氷河は大きくて迫力があって、そのような山を見るのは初めてだったので、とても感動しました。山の麓でエルクという日本では見ることのできないシカを見ることもできました。Calgary は大きな町で夜景が美しかったです。

次のイベントはクリスマスです。カナダではクリスマスの１ヶ月前から準備を始めます。ブラックフライデーに北米最大のショッピングモール West Edmonton mall に行ってたくさんお買い物をしました。土曜日、日曜日に家でクリスマスの飾り付けをしました。家の中にクリスマスツリーが４個もあって、日本との違いを感じました。冬休みに入り、待ちに待ったクリスマスイブとクリスマスの日を迎えました。クリスマスイブは家族でゆっくり映画を見て過ごし、夕食に中国料理を食べました（私のホストファミリーだけの文化だそうです）。寝る前にサンタさんとトナカイに、クッキーとニンジンを用意して、暖炉の前に置いてから寝ました。

次の日起きたらクリスマスツリーの下に、たくさんのプレゼントがあって、朝食を食べた後にみんなで順番に一つずつ開けていきました。プレゼントの中身は、自分で買うには高くて諦めたものやパートナーの Abby と一緒にサンタさんに頼んだものなどでした。最後に開けたプレゼントの中にラスベガス行きの飛行機のチケットが入っていて、それも２日後だったのですごく驚いたし、嬉しかったです。人生でこんな大きなサプライズをしてもらったことがなかったので、きっと生涯忘れることのない思い出になると思います。

↑クリスマスの朝

ラスベガスの１週間旅行は本当に素晴らしいものでした。高級ホテルのビュッフェに行ったり、砂漠をハイキングしたり、年越しもラスベガスですることができました。年が明けるときは、アメリカのタイムズスクエアの生中継を見ながらカウントダウンをしました。

留学最後の日はホストファザーが夜ごはんに私が１番好きな料理を作ってくれました。２ヶ月月間本当の親のように接してくれたホストファミリーに心から感謝しています。

学校に慣れてきたのは、クリスマスの準備を始めたころでした。誘われて昼休みにご飯を食べた後にバレーボールをやることになり、友達にも恵まれて充実した楽しい学校生活を送ることができました。友達も増えていったので放課後にショッピングモールに行ったり、家でパーティーを開いたりたくさん遊ぶことができました。カナダでは１６歳から車を運転できるので、友達だけでいろんなところにドライブに行けるので、日本とは遊び方が全然違って少し大人になった気分がしました。私の学校最後の日はパートナーのAbbyが家でパーティーを開いてくれて七人の友達が来てくれてホラー映画やゲームをして遊びました。本当に楽しくて時間がたつのがあっという間で別れがつらかったです。

この２ヶ月間の目標はカナダの人の価値観を知ること、英語力をあげることでした。カナダはいい意味で人に気を使いすぎず言いたいことをはっきり言う人が多かったり、体型を気にしすぎなかったり、私には持っていなかった価値観を得ることができました。逆に日本の接客も本当にすごいなと実感することができました。英語力はリスニング力が行く前より伸びて、みんなの言っていることがスムーズに入っていくようになりましたが、スピーキングは相手に言いたいことが伝わらなかったり言葉が出てこなかったり、たくさん悔しい思いをしました。次の目標は日本でもっとスムーズに会話できるように単語力を増やし長期留学に挑戦したいと思っています。２ヶ月間の留学で、新たな課題や、自信を得ることができたので本当にこのプログラムに参加してよかったと思っています。ありがとうございました。

充実していた４ヶ月間

北海道鹿追高等学校　２年

【きっかけ】

私の学校は一年生の時に学校の行事としてカナダ短期留学がありました。「もう一度カナダへ行ってもっと英語で会話をしたい！」と友達や先生と話している時、先生から今回の留学プログラムについて説明してもらいました。私はさらに英語力やコミュニケーション力を高めたい気持ちがあり、この交換留学への参加申込みを決め、今回カナダへ留学することができました。

【日本での２ヶ月間】

私のパートナーであるIzzyとは会う前からメールでやり取りをしていて、ある程度の食べ物の好き嫌いなどは把握できていました。またお互いに控えめな性格ということも知り、空港でIzzyを待っている時とても緊張していました。楽しみというよりも不安の方が大きかったです。しかし日々過ごしていくうちに楽しい思い出もできカナダに行く不安が一切なくなりました。

Izzyとは休みの日に一緒に折り紙をしたり、ソフトクリームを食べに行ったり浴衣を着て花火大会を見に行ったりしました。他にも動物園に行ったり小樽観光をしたりしたこともよい思い出です。学校生活では、Izzyが他の日本の友達とも仲良くなり、色々な部活にも参加していて彼女にとってもいい経験になったのではないかなと感じました。

【カナダでの２ヶ月間】

カナダに行く前日まで学校の見学旅行があり、準備する時間的な余裕はないとわかっていたので見学旅行前に大体の準備をしておきました。成田空港到着後、トラブルがありその日はカナダに出発することができなくなり、空港近くのホテルで一泊することになりました。その時に私たち 10 人がより一層友情を深められ、「ある意味いい体験できたね！」と話していました。次の日には出国することができ、無事カナダに到着しIzzyと家族に対面することができました。Izzyの家族は私の予想通り、とてもあたたかく優しくて安心しました。

学校は到着の翌日から始まりました。まず時間割についての説明があり、学校内を案内してくれました。日本の学校ではない授業がいくつもありました。最初の一週間は試しに時間割を作ってくれてその授業に参加しました。その後、私はヨガ・英語・体育・ファッション・フード・日本語の授業を選択しました。特に好きだった教科はフードで、毎日一時間から二時間あり、パンやタルトなどを作って食べました。日本語の授業では私が英語で、カナダの生徒が日本語で質問し合ったりしました。放課後には友達とウエ

スト・エドモントン・モールというとても大きなショッピングモールにも連れて行ってくれました。さらに休日には色々なところへ連れて行ってもらい、特に印象に残っているのはバンフの三泊四日の旅行です。バンフでは、湖やお店を見て回ったり温水プールに入ったりしました。移動中には野生動物をたくさん見ることができました。

クリスマスが近くなるとお店にはクリスマスの飾りが増え、町並みも美しくデコレーションされていました。日本では味わえない本格的なクリスマスを経験できました。クリスマス前に冬休みに入るので、学校最終日に友達とシークレットサンタというゲームをしました。そのゲームはくじ引きで誰にプレゼントを贈るのかを決め、贈る相手に気づかれないようにプレゼントを選ぶというものでした。来年、日本の友達とやってみようと思います。木のクリスマスツリーの下に数日前からプレゼントがたくさん置かれてあり、クリスマスの日には一人に何個もプレゼントが贈られるようになっていました。私にもたくさんプレゼントがあり、スーツケースに入りきるか心配になりました。私も事前に日本からクリスマスプレゼントを準備していました。日本らしいものを選んだので家族みんな喜んでくれました。

そしてすぐに大晦日の日が来て夜に花火を見に行き、正月には日本から持っていったお餅を食べました。年末年始は日本より盛大にお祝いする感じではありませんでした。

最終日には朝早くに起きて空港まで行きました。最後はとても寂しかったです。また会った時にはもっと英語を話せるようになりたいです。

【最後に】

今回の留学で英語力だけでなく、文化や学校生活の違いに気づくことが出来ました。この留学での経験を生かして今後の活動や卒業後にも活かすことができるようにしたいです。またカナダの文化や良さを広められるようにしたいです。

今回の留学に参加するにあたり協力してくれた先生方や両親、そしてこの北海道アルバータ州高校生交換留学プロジェクトに携わるすべての方々のおかげでこのような貴重な経験をすることが出来ました。とても感謝しています。ありがとうございました。

2 保護者編

交換留学促進事業を終えて

北海道岩見沢西高等学校　保護者

まずはじめに、平成３０年度高校生交換留学促進事業に参加をさせていただきありがとうございます。また、今回の事業にあたり受け入れ体制やご協力をいただいた岩見沢西高等学校職員・生徒の皆さんにも感謝申し上げます。この事業参加のきっかけは母親からの提言に始まり、「自分の将来を考えて、自ら考え行動できるように」今できることは何かを本人に考えさせた結果、申し込むという流れになりました。

父親が岩見沢西高教員であり、岩見沢西高職員への協力体制依頼もスムーズであったのですが、空知教育局での２者での面接は、かなりの緊張感がありました。合格の書類をいただいた後は受け入れの準備に入りました。我が家は狭いため弟の部屋を開けてもらい女子生徒用にアレンジをしました。事前にプロフィール等はいただいていましたが８月１８日の空港出迎えまでは、期待と不安の日々でした。ハナと合流し、片言の英単語の日々がスタートしました。

お互いに気を使いながら日本の生活パターンを覚えてもらいました。まず一つ目の壁は食事でした。苦手な食材を尋ねると「シーフード・タマネギ」でした。我が家の隣では祖父祖母が農業を経営しており、この時期はタマネギの収穫時期でした。家の周りにはタマネギのコンテナが立ち並んだ状態でハナにとっては、まさかの生活環境だったことでしょう。

朝食は食パンにジャム、果物を中心に、昼食は日本風のお弁当かパンを購入しました。夕食は母親が事前に本人から聞いている情報をもとに鶏肉や牛肉を中心に献立を考えました。

そんな難しい食生活の中、ラーメン・餃子・カレーは問題なく週に一度はこのメニューとなりました。高校へは父親が送迎し学校での授業もいろいろ調整していただきました。基本運動は苦手なようで体育はほぼ見学ではありましたが、体育ジャージが欲しいということで注文し購入することとなりました。岩見沢西校勤務の ALT の方との面談時間も多く取っていただきコミュニケーション不足を補うことができました。また、本人の考えや今の状況を聞いてもらえる重要な手段となりとても助かりました。高校へは休むこと無く通学しましたが、積極的に質問する様子はあまりなく、なんとなく時間を過ごしているようにも見えました。突然の地震にみまわれましたが、慌てること無く数日を過ごしていました。その後の日本での日々においては、自分の部屋で過ごす時間が多く、インターネット時代でありスマホやｉｐａｄを使用し音楽を聴くことやカナダの友人とのライン等でのやりとりで過ごしていました。家が三笠の農村地帯であり、簡単にとこでも出かけられないこともあり不便をかけてしまったと思っています。週末にはできるだけ観光やショッピング食事へと札幌方面にも出かけました。帰国前日には本人に希望を聞き「焼肉」を食べに出かけさよならパーティーとしました。日本での日々は「楽しかった」とは言ってくれましたが、後半にみられた娘との距離感が微妙に感じられました。

見学旅行をはさみ娘のカナダ出発となりました。スーツケース大２つを持ち出発しました。

現金は３万円を両替し、その他はクレジットカード（留学期間限定の）としました。スマホの通

信手段をどうするかで迷いましたが、ｗｉｆｉエリアのみでのライン通信のみとしました。結果としては問題無く必要最小限での連絡（通信）をすることができました。

　カナダでの様子を聞くと、高校は日本の大学のような形態であり、緊張もはじめの頃だけだったようです。また、寒さも意外となく使用しない衣類も多かったようです。家庭によっては、外出の多い家庭もあったようですが、ハナの家庭はほとんど出かけず週末も部屋で過ごすことが多く、残念がっていた。「カナダに来てはいるが、家の中にしかいない」状態が娘ももどかしいと、よく連絡がきていました。２ヶ月が過ぎ、帰国した娘の様子は、自信のようなものが感じられました。カナダで２ヶ月間過ごしたという経験は今後の進路活動や人生に影響し生かされると思います。高校生同士の交換留学ですので人間関係もよいときと、悪い時期があると思います。生徒の選考も簡単ではないと思われますが、生徒の興味関心の度合いや保護者の協力体制は北海道側はよいと思います。カナダ側での選考基準がどうなっているのかがわかりません。来年度以降もこの事業は継続されると思いますが、高校生にとって自分発見のよいチャンスですので、関係した生徒、家族が満足できる事業となることを祈っております。関係者の皆様に感謝を申し上げます。ありがとうございました。

今回の交換留学を終えて

北海道札幌国際情報高等学校　保護者

今回初めてこの様なプログラムに参加しました。学校から聞いてきた娘に参加したいと相談されましたが、最初はすぐに承諾することができませんでした。２ヶ月も海外で生活すること（ホストファミリーのもとですが）こちらの学校の授業も２ヶ月受けられない、何よりカナダからの子も２ヶ月受け入れること。と最初は色々考えてしまいました。でも娘が審査のために一生懸命取り組んでいる姿を見て、私たちも協力することに決めました。部活のひとつ上の学年に昨年参加した先輩もいたことも大きかったです。

ペイジのお迎え

娘とペイジは前もって LINE で連絡を取れる様にして日本に来る前からメールのやり取りをしていました。１年前に横浜に２週間ほど滞在していたみたいで日本の事も日本語もよく知っていたようです、そのことはとても安心できたことです。部屋は小学生の次女の部屋を開けましたが、押し入れしかなかったのでハンガーラックを用意しました。空港へのお迎えの時間は夜遅くカナダからの長い移動時間もあって「疲れすぎて今日は日本語で喋れない」と言っていたペイジが可愛かったです家に着いたらすぐに寝る様に言いました。

日本滞在中

娘の学校で卒業生から制服を借りて用意してくれました。学校では他のプログラムなどで２名の留学生を受け入れていたので、すぐにその子とは友達になれたようです。クラスでもすぐに受け入れてもらえたみたいです、ただ最初の頃は昼休みの会話のスピードについていくのが大変だったようです。部活は茶道とお琴と生花を順番に出られるようにして日本の文化を積極的に知ろうとしていました。娘は英語部の活動が忙しい時期で中々一緒いる事が難しかったです。

彼女の食物アレルギーには少し戸惑いました。特にコーンシロップはダメだということで食べられないものに加え食べたことの無いものにも注意しました、と言ってもカナダと日本では加工食品でも糖の種類が違うので、もう少し食べられるスイーツなどがあったかもしれません。でも大事な娘さんを預かっている以上これで良かったと思っています。今でも普段の買い物中に裏に書いてある食品表示をつい見ることがあります。休日には、ラーメンやお寿司天ぷらなど食べに行きました。中でもいなり寿司が大好きで、お弁当に入れた時にはとても喜んでくれました。クラスでもお別れ会の際に、みんなでおいなりさんを作ってパーティーを開いてくれました。

娘たちが修学旅行に行っている間にペイジは帰国することになるので修学旅行の見送りにはペイジも一緒に空港まで行きました、娘にはまた会えますが他の友達とはこれでお別れなので涙でのお見送りになってしまいましたが、それだけみんなといた時間が楽しかったのだと思います。

カナダへ

日本よりWi-fiが充実しているのでSIMカードは用意しませんでした。トランクには大量のカイロや日本のインスタント食品などを用意しましたが、娘が行っていた時は暖かくてカイロは使わず、日本の食べ物もカナダの食生活に慣れるようにとあまり食べる時がなく、ほとんどそのまま持って帰ってきました。お金に関しては、現金で３万円と本人のデビットカードに３万円を入れて持たせました。空港でカナダドルに換金しましたが取り扱いが少なく最初に行った窓口ではできませんでした。

ペイジの通う高校は日本の高校と大きく違い授業という形が無く、娘が自分で勉強できるか心配でしたが毎日学校には通い、休日にはペイジの運転する車で札幌には店舗が無いカフェなどに行ったり、モールに出かけたり、楽しそうでした。ただやはり夕方以降には行ったら危ない地区があるなど日本ましてや札幌とは違うのだと改めて感じました。クリスマスにはカウントダウンをしたり親戚みんなで集まってゲームをしたり、日本のお正月のような雰囲気だったと言っていました。その代わり正月はあっさりしていたようです。
２ヶ月はあっという間で、帰国の日の空港には有意義な時間を過ごせたのだろう、いい顔をした女子たちがいました。この期間では英語力はそんなに伸びないということを先生に言われてはいましたが、耳は少し英語に慣れたのかな?でも、これをきっかけに積極的に行動する力が身に付いたと思います。

初めてのことで何もわからない私たちに、細かく教えてくれた先生や先輩ご家族、優しく受け入れてくれた日本とカナダのクラスメイトたち、そして貴重な体験をさせていただいた北海道教育庁の皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

平成３０年度・アルバーター州高校生交換留学促進事業報告書

北海道千歳高等学校　保護者

１，参加経緯

娘が千歳高校に入学したのは、国際交流が盛んであり、それに興味をもっていたからである。留学に向けて、スピーチコンテストや国際交流イベントに積極的に参加し、英会話教室に部活が終わってから休まず通い続けていた。この派遣が決まった時は、本人は跳び上がって喜んでいた。１年かけて準備してきた努力が結ばれ、私はほっとした。

２，受け入れ準備

パートナーはリアムという男子に決まった。周りからは年頃の娘を心配する声が聞こえたが、私としては息子もいるので、むしろおもしろくなると思っていた。しかし、リアムの身長は１９０センチ近くあると知った時は、今住んでいるマンションの天井やベッドが対応できるか心配になった。とりあえず、ベッドをメジャーで測り、ぎりぎり大丈夫であったので胸をなで下ろした。

ウェルカムボードは妻の提案で、私たち家族と留学生の似顔絵を専門業者に頼み、その色紙の周りを飾り付けすることにした。その似顔絵の色紙はリアムにそのままプレゼントした。

その後は、お互いの家族でラインのグループを作り、趣味、仕事、観光地案内などたくさんのコミュニケーションを取ることができた。東北観光も本人と親に食事や滞在地を確認し、承諾を得てから行動したことでスムーズに進めることができた。留学中のトラブルも、すぐに連絡を取り、早めに解決することができた。

３，リアムとの約束事と手続き

リアムは、漫画が好きでテコンドーをやる１９０センチの大柄な武道家である。写真だけでは想像がつかなかったが、テレビ電話で話すと、とても優しそうな男の子であった。千歳空港で初めて会った時も、スムーズに会話に入ることができたので、帰宅してから約束事を書いたプリントをすぐに渡し、本人と確認した。食事、洗濯、門限などの日常生活の約束に加え、早く帰宅した時は犬の世話もお願いした。そのおかげで犬は懐き、膝にのって昼寝をするまでになった。家の手伝いは、夕食後の皿洗いをお願いした。本人は、鼻歌交じりで時間をかけ楽しんでやっていた。

お金の換金に関しては、カナダドルのレートをネットで調べ、日本円に換金してあげた。そのカナダドルは、渡航の際にそのまま娘に渡し、換金の手間を省いた。携帯電話は、本人が希望したので、SIM カードを安く注文し、自宅にあった古い機種を使えるようにして渡した。

４，リアムとの日常生活

到着して次の日は、長旅で疲れているので休むように伝えたが、娘のソフトボールの練習試合に行きたいというので妻と観戦に行くことになった。そこで、クラスメイトになる部員と会うことができ、クラスにもスムーズに入っていけたと思う。その夜は、レンタルショップで借りた仮面ライダーを見たが、登場キャラクター名を全て知っていたので家族を驚かせた。私が小さい頃に見ていた初期の仮面ライダーもインターネットで見ているそうである。日本の歌もよく聞くようで、八神純子や杉山清貴など昔の曲もたくさん知っていたので、更に会話が弾んだ。初日の学校登校は、雨のため車で送迎する。晴れた日は、息子が使っていた自転車を使い娘と２人で仲良く登校していた。カナダでは自分の車を運転して登校しているので、この２ヶ月間で体力がついてのではないかと思う。本人が滞在中に喜んだことは、本のリサイクルショップに行った時に、漫画の宝庫を見た時である。カナダ料金の３分の１で漫画を買うことができるようで、長い時間をかけて吟味し１０冊近く購入していた。

アクシデントとしては、お風呂上がりに、綿棒で耳掃除を勧めやってみたが、次の日に、「右耳が聞こえない。」と伝えてきた。耳鼻科に通院し、耳の中のゴミを全て取ってもらうと聞こえるようになった。カナダでは耳掃除をしない文化のようである。この診察代は、レシートの写真を保険会社にネットで送り容易に終わられることができた。

「地震雷火事おやじ」の言葉を教えた数日後に地震も経験してしまった。揺れた瞬間に、私は跳び起きてリアムの部屋に行き、倒れてきそうな本棚を抑えた。リアムはねぼけた様子でアラートを消そうとしていた。怪我がなくて何よりだった。停電中は、カナダと日本についてたくさん話すことができた。会話中のジェスチャーや指を使った数え方を教えてもらい、私たち家族は指が硬いことがわかった。夜はろうそくと懐中電灯の中で、折り紙などで時間を過ごし乗り切ることができた。

１ヶ月過ぎた頃に、家族で通っている床屋で散髪してもらった。この様子を動画でカナダの両親に送ると、母親がかっこいいと絶賛してくれた。息子をほめる愛情は半端ないようである。

滞在後半は、リアムの日本語はうまくなり、夜も日本語検定の問題集を使って勉強していた。わからない部分を質問してきたが、日頃なにげなく使っている日本語の難しさを実感し、説明することに一苦労した。

５，観光

妻の実家で法要があることから、それに合わせて東北に帰省することにした。自家用車を使ってフェリーで移動し、岩手県の中尊寺、猊鼻渓での川下り、厳美渓のフライング団子、山形県の山寺で登山を経験した。その夜は山形県蔵王の旅館に一泊した。この旅館で大学生の息子も合流し、家族で夕食を摂ることができた。温泉がある宿だったが、リアムは大浴場には恥ずかしがって入らずシャワーで済ませていた。宮城県の妻の実家では、新幹線に乗って仙台市に行き、アニメートの見学をした。松島では観光船に乗り、仙台名物の牛タンを食べた。また、仮面ライダー原作者である石ノ森章太郎記念館にも立ち寄った。記念館には歴代仮面ライダーの仮面や、キャラクターが乗っていた自動車など目を丸くしながら見学していた。その他には、テレビ塔、北海道神宮、ノースサファリ動物園、千歳市内はサーモンパーク水族館、千歳神社、市民文化センターでのチェロコンサ

ート、バッティングセンターに行った。また、リアムが昨年に鹿追に２週間滞在しており、友人に会いたいというので、鹿追まで連れて行った。

６，食事

朝は、パンとフルーツで朝食を取っていた。家での食事は、お茶ではなくいつも水を飲んでいた。お弁当は、娘と同じメニューにしたが、焼きそばとチャーハンは手をつけずに帰ってきたので、妻は話しあいながらメニューを決めていた。外食についても、本人の希望を聞き話し合って決めた。日本滞在中、食べたくない物は無理強いしなかった。

後半は、妻と一緒に台所に立ちチキンカツを作っていた。妻の知り合いの紹介でそばを打ちも経験することもでき、包丁さばきがとても丁寧とほめられていた。

７，カナダ留学

必要最低限の荷物で出発し、帰りはスーツケース２個にお土産を満杯にして帰ってきた。デビットカードに関しては、妻が詳しく調べ、ソニー銀行を使うことにした。とても安く手続きしたが、カードの不具合で使えなくなり、結局リアムの親の口座に送金した。カードを２枚準備しておいた方が良かったと反省している。カナダでの様子は、リアムの父親からラインで様子をいつも伝えてもらうことができた。本人は、大学生になったリアムのお姉さんのとても大きなバスルームつきの部屋を使わせてもらい大満足していた。携帯電話は、学校やショッピングモールでWi-Fiが使えたので、特に困ることはなかったようだ。

８，最後に

この交換留学に際して家族全員がたくさんのすばらしい経験をすることができました。

帰国した娘との会話も成長を感じます。このような素晴らしい機会を与えていただき、感謝しています。これからも家族で、国際交流にできるだけ協力していけたらと思っています。本当にありがとうございました。

平成３０年度北海道・アルバータ州高校生交換留学促進事業報告書

北海道苫小牧東高等学校　保護者

【はじめに】

娘が中学２年生の時、アルテピアッツァ美唄で彫刻家安田侃さんの「こころを彫る授業」に家族で参加しました。その時にアルバータ大学のオレンカさんと出会い、このプログラムに参加するように勧められたことが一番大きなきっかけでした。とはいってもまさか本当に選ばれることになるとは思いませんでした。我が家で初めての留学生、ゾーイの受入れが決まり、上の子の部屋がちょうど空いていたので、その部屋をゾーイに用意しました。

【空港へお迎え】

ゾーイがポケモン好きということで、娘がポケモンのキャラクターをつけたウェルカムボードを作成し千歳空港へ迎えに行きました。

【日本での生活】

ちょうど盆踊りの時期だったので、盆踊りに行きました。大きな輪に入ってみんなと一緒に踊っていました。周りの人達はゾーイに興味を示し話しかけてくれましたが、あまり反応がありませんでした。翌日は、振袖を着付けしてもらい、初めての経験に大変喜んでいました。

ゾーイはエドモントンの高校ではソフトボールチームに入っていて、野球観戦が好きだと言っていたので札幌ドームのファイターズ戦に行きました。応援の仕方が日本とカナダで違うことに興味を示していました。エドモントンのお父さんにはファイターズの帽子を、お母さんとお姉さんにはお弁当箱をお土産に購入し、とても満足していました。その他にも札幌の街は数回行きましたが、大変気に入ったようでした。

またエドモントン周辺では、ぶどうが栽培されていないようですが、ぶどうが大好きということで、ぶどう狩りにも行き、色々な品種のぶどうを食べ比べていました。

アルバータでは、ジャスパー国立公園やバンフ国立公園を訪れ、自然に触れ合うことが好きだと聞いたので、樽前山や札幌の円山を登山したり、支笏湖湖畔を一緒にサイクリングしたりしました。どの日もとても天気が良く爽やかなアウトドア日和となりました。

日本文化の特徴の一つである温泉にチャレンジしないか誘いましたが、やはり少々抵抗があったようで温泉文化の紹介は出来ませんでした。

胆振東部地震の時は真夜中の大きな揺れでしたが、ゾーイは取り乱すこともなく冷静でした。停電は翌日まで続いたため、キャンドルと懐中電灯で一夜を過ごしました。

食事は、お寿司や旬のいくら丼を始め梅干しや納豆などたくさんの日本食にも挑戦していました。あまり偏食がなかったので、食事で苦労することはありませんでした。

【娘の渡航準備】

ｅＴＡは思っていたよりも簡単に申請することができました。お金に関しては、カナダドルと日

本円の現金を少しとＶＩＳＡデビットカードを作って持たせました。カードは、ほとんど全ての場所で使用できたようで大変便利でした。冬物の服やスキーウェアなどのために大型のスーツケースを二つ持って行きました。

【エドモントンでの生活】

エドモントンでの学校生活は、楽しく充実していたようです。娘から日本とは違う授業内容や校風などの話を聞く度に、新鮮で驚きの連続でした。

ハリーエインリー高校には、世界各国から留学生を受け入れている高校で、様々な人種や宗教の違い、さらにはＬＧＢＴの人もいて、その友達と母国の事やカナダとの違いなど社会的な意見を交換し、互いに敬意を込めて、褒め合い高め合っているという事を聞き、感銘を受けました。

学校以外では北米最大の複合型施設「ウエストエドモントンモール」や高校からすぐの「サウスゲート」へ行ったり「ウォーターパーク」で友達と遊んだりと楽しい思い出がたくさんできたようでした。

娘はホストマザーの態度に少々困惑したところもあったらしいのですが、娘なりに行動し解決したようでした。

ホストファミリーはバンフ近郊のキャンモアに連れて行ってくれました。ホストマザーには病院代を立替えていただき感謝しております。

【最後に】

娘にとって、高校生という若く多感な時期に異文化交流を経験することができ、これからの人生の糧となる貴重なものだったと思います。

特にカナダへの交換留学は勇気を出して臨んだ大きな挑戦でした。このプログラムを通して今まで見たことのない娘の成長を見ることができ、感謝の気持ちでいっぱいです。

親としてもこの経験を通して、新たな価値観を見出すことができました。

最後にこの４か月間、娘は友達を始め、沢山の親切な人達に支えられ過ごすことができました。お世話になった方々にこの場をお借りして改めてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

平成 30 年度　北海道・アルバータ州高校生交換留学促進事業報告書

北海道登別明日中等教育学校　保護者

留学希望から決定、受け入れまで

娘は、先輩達が留学する姿や学校に来ている留学生の姿を見て自分も留学したいと時々私達に話をすることがありました。しかし、家の中に他人、それも外国人がいる状況が想像出来ず、かなりのストレスになることが予想され、お世話する自信もなかったため具体的な話しをせずにいました。４回生になり学校から交換留学の案内が来ると娘はすぐに申込書を取り寄せ、先生に相談に乗っていただきながら、たくさんの書類を準備し始めました。その姿を見ているうちに、私達親も全面的に協力してあげようということになり、親子で面接の練習をしたり、留学が決まってからは部屋・制服・日用品等の用意、旅行を計画したりと準備を進めていきました。

アミリアはカナダでの日本語弁論大会で優勝し他の留学生より早く来日、大阪で開かれた日本語プログラムに参加した後、北海道にやってきました。その為心配していた時差ボケは全くありませんでした。

食事について

受入れ前の情報では、寿司が好きで日本食に興味があるとあったのですが、いざ来てみると日本食は全くダメでした。味噌が嫌いで味付けは塩コショウが好き、鶏肉はささみか胸肉、野菜は決まったものしかほとんど食べません。水分はリンゴジュースかスプライト。お弁当はいつも１～２割ほどしか食べてきませんでした。嫌いなものを聞いてもはっきりとした返事もなく、あまりの偏食ぶりにこのままでは体調を崩すのでは？と心配しましが、ある時から無理せずアミリアが好きなもの、マックのチーズバーガーに鶏胸肉のグリル、トマト味のスープ等食べられるもので献立を回すようにしてみました。私自身のストレスは軽くなり、それでアミリアが体調を崩すことはありませんでした。

アミリアと娘の関係

アミリアはシャイな性格だと事前情報からわかってはいましたが、最初のうち自宅で娘とあまり話をしませんでした。仲良くなったのは家族で洞爺湖温泉に一泊旅行に行き、娘と二人一緒の部屋で一日過ごした後からでした。

学校での様子

アミリアは日本のアニメが好きで自分で絵を描くのが得意なため学校では美術部に入りました。そこでとても気の合うお友達が出来て学校では楽しく過ごしているようでした。

地震

アミリアが我が家に来てから約３週間後の９月６日に北海道胆振東部地震が発生しました。生まれて初めての地震体験だったそうです。二日間程でインフラは回復したものの、その後も物資の

流通は悪く食事の準備が大変でした。また学校の試験日が繰り下がったことで出掛けることも出来ず、かなりストレスが溜まっていたようです。地震から一週間もたたないうちにどうしても外に遊びに行きたいと訴え、室蘭と登別の観光名所へドライブに行きましたが案の定観光客は全くいませんでした。

自動車事故

　アミリアを車に乗せ信号待ちをしていたところ、後ろから乗用車に追突されました。幸い極軽い追突でアミリアには怪我はなく病院受診にもなりませんでしたが、警察や教育庁担当者、担当教諭、アミリアの御両親に連絡と相談をしました。こちらに過失はない事故でしたが、アミリアの御両親の心情を考えるといたたまれない気持ちでしばらく過ごしました。

帰国

　地震、自動車事故等の突発的なエピソードはありましたが、それ以外は室蘭（地球岬、イタンキ浜、白鳥大橋、リサイクルショップ、浴衣で港祭り）、登別（温泉、時代村、水族館、クマ牧場）、白老（お祭り）、洞爺（花火、温泉）、札幌（アニメショップ巡り）、週末には外食等なるべく出掛けました。また日本のアニメが好きでカナダでは手に入りづらいキャラクターのネンドロイドやフィギィアのネットでの購入のお手伝いをしたところとても喜んでくれました。食事の事や娘とアミリアの関係で悩みはありましたが、担当の先生に相談に乗っていただきながら、毎日短時間でも日本語でコミュニケーションをとりながら二か月間が過ぎました。帰国前日の夕食は何がいいかと尋ねると外食するより私が作る食事がいいと言ってくれたのが嬉しかったです。アミリアの帰国後、娘より私の方がアミリアロスのような状態になってしまいました。

娘の留学

　留学決定から少しずつ準備を始めてはいましたが、アミリア帰国後インフルエンザワクチンの接種や市販薬では対応出来ない薬品の処方をお願いするための受診、細かな日用品の準備などで大忙しでした。留学当初は友達も出来ず寂しさから娘から頻回にラインが来ていましたが、徐々に間隔が空きカナダでの生活を楽しんでいるようでした。また案の定食事は野菜が食卓に上がることはあまりなく、食事の回数・量自体が我が家より少ないようでした。休日は朝昼兼用で野菜ジュース一杯のみ等ということもあったようですが、酷く体調を崩すことはなかったようです。

　娘はカナダの教育は何より個性を大切にしていると感じたようです。異文化に接し自分の言葉で自己表現する事の大切さを学んで帰ってきたためか、帰国後は自分の考えを以前よりも伝えようとしてくれるようになりました。家の中が以前より明るくなったと感じています。色々な苦労はありましたがこのプログラムに参加して本当に良かったと思いました。

最後に娘の留学に際してお世話になった先生方、教育庁の方々たくさんのサポートありがとうございました。

留学生受け入れの経験を通して

北海道浦河高等学校　保護者

留学生の受け入れが決まり、まず始めに行なったのは、家中の片付けです。普段は見て見ぬ振りをしていた色々な所を見直しました。知らない所で生活する留学生が、快適に過ごせるようにということを考えてのことでしたが、これには時間もお金も多少かかりました。息子が残して行った壁の穴を修復したり、ブラインドやカーテンを付け替えたり、新しく寝具類を揃えたり。今思えば苦労はありましたが、おかげで家も少しはきれいになったので、いいきっかけだったかもしれません。

受け入れが決まって同時に行なった準備のもう一つに、スケジュールを立てることがありました。夏休みが終わってからの受け入れだったため、様々な体験や旅行をどのタイミングで実行するかを考えるのは、なかなか難しい仕事でした。娘は部活動に所属していて、土日も部活があり、なるべく休まずに楽しい時間を作ることを目指しました。２ヶ月と言えば長く感じるかもしれませんが、８週間と考えると、以外とあっという間に過ぎていきます。うちは共働きのため、ホームステイが始まってからはなかなかじっくり考える時間が持てないと思い、あらかじめお出かけの予定を考えていたことは正解でした。

食事について、事前に聞いていた話しでは、「嫌いな物はない」ということでした。彼女は「お弁当」のことも知っていたので、基本的には娘と同じ物を持たせていました。ただ、トマト、アボカド、キノコ類などが苦手であることが日々の食事のなかで判明し、対応しましたが我が家ではレギュラー食材だったため、少し苦労しました。

最初の頃は、朝食も同じ物を提供しましたが、朝が苦手な彼女はゆっくり食べている時間がなく、「どちらがいい？」と聞くと、ほぼ毎日シリアルを食べることになりました。時々、パンを用意したりフレンチトーストを作ることもありました。

来日してすぐ、「食べ物では何が楽しみか？」ときいたところ、「シーフード」ということでした。エドモントンでは海がないため、新鮮な魚（刺身）はとても喜んでくれました。家では手巻き寿司、外出先では回転寿し、お刺身定食などを食べた日は、彼女のテンションも上がり、こちらも嬉しくなりました。

私たちが住む町は、札幌から３時間近くかかり観光スポットも特にない場所なので、どうやって週末を楽しんでもらうかが課題でしたが、町内で彼女が喜んでくれたのは、何と言っても海でした。天気のいい休日に、近くの海辺に行って彼女のお母さんがコレクターだという「シーグラス」を夢中になって拾いました。カナダに帰国する時にも、荷物がたくさんありましたが、しっかり持って帰るほど大切な思い出になったようです。

旅行には３回、小樽、定山渓温泉、函館へ行くことができました。温泉に入るのは初めてでしたが、入り方は知っていて、「これが普通」と何度も自分に言い聞かせながら入っていました。ダメだ

った時のことも考え、ホテルにはシャワールームがついている部屋をリクエストしていたため、「無理はしなくていいよ」と伝えていましたが、入ってみると「リラックスできる！」と、とても気に入ってくれました。日帰りで、伊達時代村にも行きました。

留学生を受け入れることで心がけたことは、とにかくストレスを与えないようにすることでした。こちらが「あれ？」と不思議に感じることもよくありましたが、小さなことは「文化の違い」と思い、あまりとやかく言わないように徹しました。理由は、彼女の性格が感受性豊かで、思っていることをストレートにぶつけるタイプではなかったため、こちらから注文をつけることで逆に上手くいかなくなることが予想されたので、少しくらいのことは見守るようにしました。もう一つの理由は、留学生が心地よく思ってこちらで生活することができたら、娘がカナダへ行った時に、きっと同じように対応して下さるだろうと考えたからです。おかげさまで、娘はカナダではホストファミリーと過ごした時間がとても居心地がよく、何よりも大切な時間となったようで有り難く感じています。

良いことばかりではなく、実際には大変なことも色々ありました。地震が起きて余震の心配もあったため、学校が休みの二人を一緒に職場に連れて行ったり、留学生が体調不良で学校を休んだ時には、私も仕事を休んで付き添いました。また、球技大会では肘から膝までひどい擦り傷を作って帰ってきたり、マラソン大会に参加することになり、「また具合が悪くなったら…」とハラハラしたりもしました。

お見送りの時には、一緒に過ごした２ヶ月を思い出し寂しい気持ちで一杯になりました。でも、本当の所は、「無事に親元に返すことができた」という安堵感の方が大きかったかもしれません。

私が子どもの頃に夢見た留学を、我が子に経験させるチャンスを頂いたことに大変感謝しています。関係者の皆様、ありがとうございました。

カナダ交換留学について

北海道函館中部高等学校　保護者

１　サブリナの受け入れについて

過ぎてみればあっという間で、受け入れ前に感じていた不安がなんだったのか、即座には思い出せないくらい、総括すると「順調でした。」ということになるのだと思います。

函館にきたサブリナは、陽気で楽しく、きさくな性格で、話題も多く、日本に来て食事や睡眠、生活環境などいろいろ変わったと思うのですが、よく順応していたと思います。こちらに来てすぐ髪を黒く染めるように学校から指導され、着いた翌日にパーマ屋さんに連れて行ったのですが、私としては、きっと外国の学校では普通のことだと思うからカルチャーショックを受けるのではないか、日本の学校が怖くなって帰りたいと言い出すのではないかと心配しましたが、本人は多少名残惜しそうにしていたものの、さばさばとした感じで助かりました。

また、私の家庭は共働きで、６時過ぎでないと親が帰宅せず、子どもは部活動でもっと遅いので、かぎっ子も致し方ないと思っていたのですが、ひとりお留守番になったのは数える程で、学校でＡＬＴの先生やクラスメート等と過ごし、子どもと一緒に帰宅するのが普通になりました。そのおかげか、子どもの部活動の仲間とも仲良くなり、一緒にカラオケに行ったり、御飯を食べに行ったり、買い物に行ったり、勉強しに行ったりと、ＪＫ生活をエンジョイしていたと思います。みんなでバーベキューもやりました。

私の家では、毎日のお弁当や食事の支度はお父さんがしていたので、よく年頃になってお父さんが苦手になる女の子のように、サブリナも違和感を持つのではないかとお父さんが心配したのですが、そんなことは全くの杞憂で、後からわかったのですが、サブリナの家でも炊事当番はお父さんがしているらしく、カナダに帰ってからも「日本のお父さんのご飯が食べたい」と言っていたようで、とてもよくお父さんと交流してくれましたし、お父さんの方も、家族はそれまで知らなかったのですが、驚くほど英単語をよく知っており、嬉々として英語を話すのでびっくりしました。時には、英語のおやじギャグにもチャレンジして、サブリナを笑わせていました。

学校が休みの日は、子どもは部活動なので一緒に過ごすことができず、親が観光や温泉に連れ出しました。定番の函館山からの夜景や、山麓の歴史的建造物の紹介、函館港のクルーズ船、赤レンガ倉庫群の散策、温泉につかって、和食を堪能して、別の日には、大沼公園のドライブ、パワースポットなどをまわりました。また、女の子でしたので是非着物を着せてあげたいと思い、七飯町の文化団体の方で、七飯町の交換留学生に着付けをしているという佐藤郁子先生に着付けをしていただきました。

サブリナは、魚が大好きで、特にイカが好きだというので、函館の海洋研究センターでイカの養殖についてレクチャーを受けたり、イカを実際にさばくイベントに参加したりしました。また登別のマリンパークニクスまで小旅行もしました。

サブリナは、日本に来る前から、ラインで「お花を習いたい」と希望していましたので、学校の華道部に聞いたところ、たまたまサブリナのいる間は１回しか活動日がないことがわかり、学校の近所でお花の教室を探したところ、古流かたばみ会の仲谷理楊先生がお引き受けしてくださることになり、週に１回マンツーマンでお花を学びました。毎回、先生の息子さん（中部高校２年生）が一緒に受けてくださり、お花の難しい講義や実技指導を通訳してくれました。

最後に、生まれて初めての地震を経験し、しかもその後の停電もあり、サブリナは大丈夫か、大切なお子さんを預かっている方としては気が気でなかったのですが、持ち前の順応の良さとタフさで乗り切ってくれましたので、大変助かりました。

２　カナダでの生活について

英語漬けになるのが一番だとはわかっていても、ラインという便利で気軽な通信手段があると、つい色々と確認したくなって自制が効きませんでした。普段からお父さんは早起きで、お母さんは夜更かしなので、子どもの時差に合わせて、夜はお母さん、朝はお父さんが通信していました。

留学中も部活動は続けて欲しかったのですが、カナダの学校では部活動に入るにもトライアウトを受けなければならないというので、３度の選抜を経て、何とか入ってくれました。最初は監督から「期間が短いので公式の大会には参加できない」と言われたのですが、結局、カルガリーへの遠征や大会の試合にも出場させてくれました。大会の様子はインターネットで配信され、日本からも観戦できました。カナダのバスケットボールチームでは、背の高い子どもがたくさんいて、日本ではセンターポジションだったのに、向こうでは、ガードやフォワードなど未経験のポジションになり、今までと違うセンスやスキルを求められ色々苦労したようですが、バスケットボールに広がりができる良い経験になったのではと思っています。

英語については、日本にいる時から、サブリナと会話しているのを聞いていましたので、語学としてはそれ程心配していなかったのですが、声が小さくて、表情もきっと外国人から見たら喜怒哀楽が薄くてわかりづらいのではないかと思っていました。外国の方は、サブリナを見ても、とってもオーバーアクションで、日本人からしたら気恥ずかしいくらいです。その辺りがどうだったのかは、実は聞いていませんが、友達がたくさんできたというし、カナダのご家庭でもかわいがられたというので、私の杞憂だったのかなと思っています。

カナダは今年暖冬だったらしく、マイナス２０度が最高だったということですが、サブリナの家には、庭に自家用のホットタブがあり、寒い日はホットタブを楽しむらしいのですが、うちの子と

は相性が悪く、入るたびに体調を崩していたようです。

サブリナ家では、世界遺産のバンフ国立公園や、ロイヤルティレル古生物学博物館、ジャスパー国立公園のスキーに連れて行ってくれたり、親類・知人との交流の場にご招待してくれたり、たくさんのイベントに参加させていただいたほか、普段もご家庭でボードゲームやカードゲームなどをしながら色々なお話でコミュニケーションを図ってもらったそうで、本当にありがたく感じています。部活動があったので、ほぼ毎日お父さんが学校まで迎えにきてくれて、お腹がすいただろうと、途中食べ物屋さんに寄り道してくれたりもしたそうです。とても充実した楽しいカナダ生活だったようで、親としても満足しています。本当に貴重な体験をさせていただいたことに感謝します。

最後になりますが、本事業の運営をしてくださった北海道教育庁の皆様をはじめ、函館中部高校の先生方、生徒の皆様、お世話になった全ての方々に心より感謝申し上げます。

平成３０年度　北海道・アルバータ州高校生交換留学促進事業報告書

北海道旭川北高等学校　保護者（Harry Ainlay HS）

４月頃、交換留学促進事業に応募したいと娘から相談を受けました。道から１０名のみが参加できるプログラムであることもあり、挑戦することに意義があるといった軽い気持ちで応援することにしました。

書類などは娘がすべて作成し、娘に言われた通りに必要事項を記入し、面接の日を迎えました。

面接官が「日本語と英語で質問します。」と娘に伝えた時、英語で面接があるなどと聞いていなかった私は、面接官に「お母さんには日本語で質問しますから安心してください」との言葉を頂くほど、驚きの表情をしていたようです。

しかし、娘が英語での質問に、身振り手振りを交えながら英語で楽しそうに答える姿を目の当たりにし、なお一層驚きました。何故なら娘が英語を話す言葉など、一度も聞いたことがなかったからです。その様子を見て、留学を希望する娘の真剣な思いを、改めて感じられたように思います。

その後、プログラムに参加させて頂ける連絡を受け、受け入れに対して家族での話し合いを繰り返し行いました。部屋の準備、食事の内容、観光など色々な事を考えましたが、一番大切にしたことは、ホストファミリーを大好きになってもらうことでした。

ホストファミリーを好きになることは、日本人を好きになること、日本人を好きになることは、日本という国をすきになること、さらには日本の良い伝統や文化にたくさん触れさせてあげることが受け入れる側の責務と考え準備を進めました。

今回、受け入れたエイミーは、大変人見知りな性格と両親から聞いていました。その為、無理に家族との時間を作ることはせず、ゆっくりと慣れてもらえるような生活リズムを考えていました。しかし、実際エイミーが自分の部屋で過ごすことはなく、就寝までのすべての時間をリビングで家族と一緒に過ごしていました。

最初の二週間ほどは、受け入れる側の私たち家族もストレスを感じることもありましたが、結果的には、エイミーの早く家族となじもうとするその努力が、残りの日々を大変有意義な時間にしてくれたのだと思います。もちろんエイミーの片言の日本語と、娘の通訳は必要不可欠では、ありましたが・・・

エイミーはカナダでメジャーなカードゲームや遊びを教えてくれ、娘は日本の遊びや言葉を教えながら、家族で楽しむ時間と笑い声が日に日に増えました。

週末は天候に恵まれ、色々な所へ連れて行くことができ、「日本は全部がきれい」と喜び、日本の食べ物も、喜んでくれました。エイミーの特にお気に入りの食べ物は、カツカレー、焼き肉、焼きそば、たこ焼き、抹茶の和菓子、ミスタードーナツなどでした。

そして何より、エイミーと娘の関係が大変良好だったことが一番で、受け入れ前の心配は不要だったことに一安心の日々となりました。

無事にエイミーを見送り、一息ついた後は、娘の留学に向けた準備がはじめる中で、保険のことや、デビットカードのこと、留学中に困ったことなどを、前回参加した方のプレゼンテーションで知ることができたことが、大変役立ちました。また、三名の留学生が同じ学校へ通うことも安心の

一つでした。
　今回、娘がお世話になったエイミーの家族は、父親がイタリア人、母親がパキスタン人で、予想以上に文化の違いや、価値観の違いに戸惑うこともあったようですが、その環境が娘の英語力の向上や、心の成長に繋がったように、思います。また、日本のすばらしさ、家族の大切さも感じることができたようです。
　留学中は、週末に連絡を取り合う程度でしたが、娘は、毎日携帯で留学日記を書き、その日記を私たちが、毎日読むことで、十六時間の時差も感じることなく、楽しかったこと、辛かったことなどを知りながら、私たち家族も、ホッとしたり、心を痛めたりの日々を過ごしながら、その中で、娘の成長を感じることができました。
　今回の経験を糧に、娘が自分らしく、自分の進みたい道に向かって、努力する心、感謝の心を忘れずに歩んでいくことを、願います。

　最後になりますが、今回このプログラムに参加し、無事終える事ができたことに心から感謝いたします。
　北海道教育庁学校教育局高校教育課の職員の皆様、引率していただいた先生、旭川北高等学校の諸先生の暖かな励ましと、ご指導にお礼申し上げます。
　本当にありがとうございました。

交換留学に参加して

北海道旭川北高等学校　保護者（Christ the King HS）

海外へ行ってみたい。娘の夢を聞いて、そんな簡単には行けるわけがないと私たち親は考えていました。それが新千歳空港まで留学生のアビーを迎えに行き、我が家にカナダ人がやって来ました。

初めは何を伝え、どう接していけば良いのか全ての事が不安ばかりでしたが、家族でその都度話し合うことが多くなりました。今までの生活を普段どおりに続けて無理をしない。

そして家族の笑顔が増えることでアビーにはリラックスしてもらおうという目標を見つけました。それでも生活習慣の違いは多く、お互いにわからないことはたくさんありました。

アビーは毎日食卓に上がる味噌汁をいつも残しており、味噌の味が嫌いなのかと思っていたら、器に口を付けること、音を立ててすすること、食する方法がわからないということが一週間近く経ってやっとわかりました。

It’sOK　を伝えるとそれからはラーメン、天ぷらそば、鍋、焼きそばを楽しみ、生寿司の刺身は恐る恐る口に入れ味わいましたが、生ものには抵抗があるようでした。ホットプレートを使った夕食は焼肉、ぎょうざなど手作りを一緒に手伝ってくれ、アビーもカナダから持参したホットケーキミックスでパンケーキを調理してくれたこともあります。

好き嫌いはわりと多く、調理に困ることもありましたが娘と同じ弁当を持たせると食べられるようになった食材があったようです。

白米を好み、おにぎりが好きだと話してくれました。しかし巻き寿司は箸からポロポロとこぼれ落ち一口で食べるのをやめてしまい、いなり寿司は口に入れた時に想像していた温度と違っていたようで”Cold”と驚いていました。時には手で食べることもあると、皆で指をなめ、笑いながら食卓を囲むことも多くなりました。

家族皆で行った銭湯では、最初は怖かったと話していましたが、湯船で会話しながらゆっくり温まることにリラックスした表情も見せてくれました。

主に会話の中心は娘が担当しておりましたが、部活やテストなどで娘が不在の時は片言の英語と身振りで私たち親はアビーに接しておりました。時にはラインや文章で気持ちを伝えることもあります。コミュニケーションに不便はありましたが、私たち家族がよく話し合うようになりお互いを思いやる気持ちが多くなったように感じました。

アビーが電車を乗り間違えた時、アビーの不安な状況を早く解決するために家族みんなで連絡を取り合い走り回ったこともありました。今までハグをしてコミュニケーションを図ることは少なかったのですが、自然とアビーに触れることで安心や絆を育むことができたように感じます。

娘は初め、合宿や小旅行など経験しておりこの留学に何の不安もないと話しておりました。

先に交換留学に来ていたアビーを見ていても実際はどうだったのかわかりませんが，様子を見ている限り淋しそうではなかったと娘は感じていたとのこと。

日本にいてアビーとの英会話のコミュニケーションもそこそこ上手くできると少し自信もあったようです。

しかし、外国に行くということ、生活をすることは想像を超えて不安も大きく恐怖さえも感じたと話しておりました。実際の英会話はとてもテンポが速く誰もかれもが怒っているみたいだと。

ホームシックは無縁。と話していた娘は着いた初日にホームシックになったと電話をかけてきました。遠い異国に行った娘と離れ離れになる私たちもそれは大きな不安と戦うことになったと覚悟をしましたが、その後、娘は温かく迎えてくれたアビーの家族と触れ合うことで順調に精神状態を平常に戻していったようです。

カナダの世界遺産の公園に出かけたり、乗馬や水泳、ショッピングなど様々な体験をさせて頂いたとのこと。

いつも家族で過ごしている写真をアビーのお母様はたくさん送ってくれました。それは私の携帯電話の容量を超えるほどの枚数になりました。

初めて親元を離れ、言葉の通じない外国で自分の行動でお世話になっている人に迷惑が掛からないようにしなければいけない、と自分の責任を痛感したとのこと。

毎日のように電話はありましたが、日々少しずつたくましくなっていくわが娘を尊敬しながら見守っておりました。

帰国してからは時差の影響もほとんどなく通常の生活を取り戻しておりました。

２か月、短いようで長い生活だったようです。日本では部活や塾、学校行事でやらなければならないことが多く夜更かしの習慣があったのですが帰国してからは毎日早めに就寝しようと努力しています。以前にはなかった姿勢です。

たった２か月の体験ですが、私たち親ももちろん娘も人生の中で本当に貴重な経験をさせていただきました。

さらに本場のクリスマス、年越し、娘は 12 月生まれなのでアビーの家族に祝っていただき私たちがうらやましく思うほどの楽しい時間を過ごさせていただいたようです。

本当にありがとうございました。一生忘れることのできない経験を私たち家族全員させていただいたことに心より感謝申し上げます。

平成 30 年度高校生交換留学促進事業に係る研修報告書について

北海道鹿追高等学校　保護者

【はじめに】

私たちの娘が通う鹿追高校では、町の助成事業により１年生全員が２週間のカナダ研修旅行に行きます。娘が鹿追高校を選んだのもまさにこの研修旅行が一番の目的でした。

内気で自主性に乏しい娘ですが、この研修旅行から帰国してから間もなく、自分から「北海道の交換留学に申し込みたい」と私たちに伝えてきました。この積極的な姿勢に、私たちは詳しい内容を確認することもなく参加を承諾しました。

【事前準備】

十勝総合振興局で行われた面接は私たち家族のみで、運良く参加の許可をいただけました。道庁で行われた事前説明会では、参加する子どもたちがその場で LINE 交換を行い早めに打ち解けることができたようです。その後の準備にも役立っていました。前年に参加された保護者の方と話せる機会をいただけたのはありがたいことでした。細かいところの確認ができて、ずいぶんと不安が払拭されました。

【留学生受け入れ】

イジーが千歳空港に到着したのは夜だったので、そこから帯広まで車で走り自宅に到着したのは深夜２時ころでした。まずは疲れを取って欲しいので「翌日は起こさないから、目が覚めるまで眠っていいよ」と伝えましたが、翌日の９時には笑顔で部屋から出てきてくれました。

イジーは２年間日本語の授業を選択していたとのことで、簡単な単語を話すことができました。また、話す以上に聞き取り理解することができました。会話はほぼ英語で行いましたが、今思えば彼女はもっと日本語で会話をしたかったのだと思います。

口数の少ない子でしたが、カナダではよく話していたと娘から聞きました。やはり外国で話をすることは緊張するのかも知れません。

日常生活で不自由を感じたことはほとんどありませんでした。彼女は日本食を好んで食べてくれました。ただ受け入れ２週間を経過したころにカナダの保護者が、「どうも食事の量が足りていないようだ」と連絡をくれました。本人に直接訊ねてはいましたが、言いづらかったのでしょう。

アルバータ州は内陸なので、観光は海に行こうと決め、小樽へ旅行に行きました。蒼の洞窟ツア

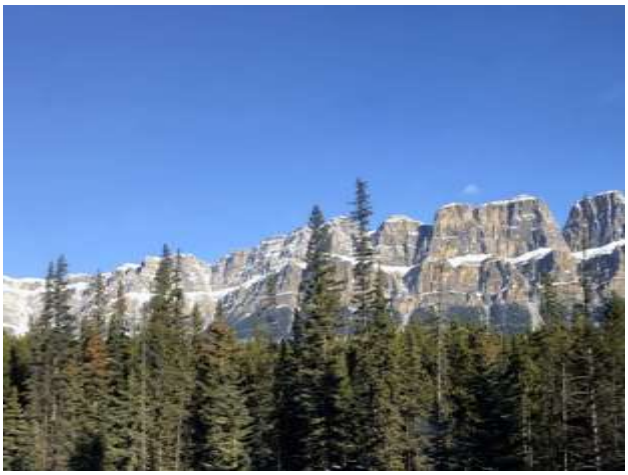
ーや水族館、ガラス工芸体験、夜景などを楽しみました。
十勝管内では毎週のように高原・展望台・温泉でアイスクリームを食べ歩き、花火大会では浴衣を体験し、然別湖ではカヌーやエアトリップで遊びました。
帰国する前に「どこが一番良かった？」と訊いてみると、予想外に「札幌」と返ってきました。女子高生には自然体験よりも街中観光の方が良かったのかも知れません。

学校生活はほとんど子どもと先生にお任せでした。本人に無理のかからない授業を選んでいただいた先生には、とても感謝しています。
弁当も娘と同じもので良かったのでほとんど苦労はありませんでしたが、通学が不便な学校なので、部活に参加するときは私たちが車で迎えに行きました。

イジーが帰国する時は、私たちだけが目を潤ませていましたが、子どもたちは「また２週間後に会えるし」と、ケロッとした顔で別れていました。
彼女が来てくれたおかげで、日々の生活を流されるように過ごしていた自分たちに気づくことができました。子どもたちがもっと小さなころは、どうやって子どもたちを楽しませようと一生懸命考えていましたが、大きくなるにつれそういう機会がずいぶん少なくなっていました。
彼女と過ごした日々はとても楽しい日々でしたが、それだけではなく私たち家族に大切なことを思い出させてくれた素晴らしい時間でした。

【留学】
修学旅行から帰った翌日にカナダへ出発だったので、新しい衣類を購入する必要がありました。お土産は到着時とクリスマス用の２種類を用意し、正月に披露できるように餅をもたせました。北海道米も持たせましたが、美味しいと評判が良かったようです。

現地での生活は、全面的にホストファミリーにお任せでした。かなり頻繁に LINE で連絡を取り合っていたので、日常生活でお互いにストレスを感じることはありませんでした。
１週目からバンフ国立公園方面に３泊の旅行に連れて行っていただき、その後もアルバータ州内をあちこち連れて歩いていただきました。カナダならイジーも運転ができるので、エドモントンまで買い物に出かけてずいぶんと楽しんだようです。



娘はカナダの学校をとても気に入っていました。選択制の授業、自由に動ける授業中の教室、どこで食べても良い昼食など、彼女の気質にあったようです。日本語の授業の手伝いもさせてもらいました。

留学期間中、すべてが上手くいったわけではく、大小のトラブルもありました。ホストファミリーに間に入っていただき、　解決へ向かうことができたことに感謝しています。子ども同士のトラブルに対しても、親の共通認識として、「子どもたちがこれからも良い関係でいられるように」と考えられたことが良かったのだと思います。ホストファミリーとは十分なコミュニケーションを取ることの重要さを強く感じました。

子どもたちを仲直りさせたのはクリスマスのイベントでした。商業的な日本のクリスマスとは違う、カナダのクリスマスを経験できたことはとても素晴らしかったと思います。今年から我が家のクリスマスも少し趣向を変えようかと考えています。

【謝辞】

この度は交換留学という貴重な機会を与えていただき、心より感謝申し上げます。帰国した娘の笑顔を見たときに、行かせて良かったと強く思いました。

語学が飛躍的に向上したわけではありませんが、今回の経験は娘の今後の人生に多大な影響を与えると感じています。何より一歩踏み出すことができた娘を褒めてあげたいと思います。

この交換留学では多くの方のご支援・ご協力をいただきました。北海道学校教育局の皆様、鹿追高校担当教員様、そしてカナダで娘を優しく支えてくれたスベンとジルに心より感謝とお礼を申し上げます。ありがとうございました。

3 担当教員編

交換留学にかかわる課題と成果

北海道岩見沢西高等学校　教諭

今回の高校生交換留学生促進事業への参加は、本校としては初めてのことであり、手探り状態の中で４ヶ月が過ぎたというのが率直な感想です。学校としては、職員会議で留学生受け入れの了承を得て、関係者数名で形式的に「留学生委員会」を立ち上げることから始まり、教頭および英語科主任、受け入れHRクラス担任（英語科教諭）が、その実務にあたりました。本事業参加にあたっての教育庁担当者との間の事務手続きは、簡素化が進んでいるためか、以前聞いていたほどの負担感はなく安堵しました。ただ、校内的には、やはり初めての留学生受け入れということで、留学生の時間割作成について、どの授業を受けさせるか、日本語の個人授業はどう行うか、自習時間はどの程度にするかなど、かなり腐心しました。日本から海外留学する生徒は、現地校での授業を英語で受けることを前提にしていますが、カナダからの留学生は必ずしも日本語で授業を受けるレベルにあるとは限らないことが、学校側にとっても留学生にとっても大きなストレスになりかねないと思われます。実際、今回の留学生も、「英語」以外の一般教科を日本語で理解できるレベルにはなく、「体育」「家庭科」「音楽」「書道」「美術」などの実技教科を中心に時間割を作成しました。これに加えて、英語科教諭６名で「日本語」の個人レッスンを週に１コマずつ担当しましたが、図書室での「自習時間」も１日に1、２コマ入れざるをえませんでした。幸運だったのは、本校にはALTが常駐していて、他校訪問がない日は「カウンセリング」の名目で留学生の相談に乗ってもらえたことです。そのおかげで留学生の不満やストレスが少なからず解消され、留学生の本音を知ることもできました。

今回改めて痛感したのは、交換留学の成果は、参加する生徒の人柄や意欲、交換留学生同士の相性や人間関係作りに大きく左右されるということです。実際、今回の場合、留学生と本校の日本人生徒は、はじめの２～３週間はうまくいっていたものの、その後は関係が少しずつ悪化し、結局最後まで十分な改善をすることはできませんでした。そもそもこの事業に応募する段階で、日本人高校生はもちろんカナダ人高校生も、その多くは留学先の学校生活やホームステイでの生活を通して、異文化体験や友達作りに意欲的であると思いますが、十分な動機付けのない生徒がいると、やはり「期待外れ」になってしまします。できれば、そうしたミスマッチが起こらないように願うばかりです。

一方、今回の交換留学によって多くの成果も得られました。ALTくらいしか外国人との交流がなかった本校の生徒たちにとって、カナダからやって来た留学生そのものが、カルチャーショックであり異文化体験になったはずです。とりわけ、留学生の入ったHRクラスの生徒たちや、個人的に親しくなった生徒たちは、英語のネイティブスピーカーとの「リアルな英会話」を大いに楽しんでいました。こうした経験を通して、一人でも多くの生徒が、英語学習への興味関心を高めたり、英語でのコミュニケーションに挑戦しようとする態度を身に付けたり、その知識や技能を向上させた

り、将来英語を使う職業に就きたいと思ったりするきっかけになればと期待するところです。

　もちろん、カナダに交換留学した生徒本人が、カナダでの学校生活やホームステイを通して、素晴らしい成果を得られたことは言うまでもありません。学年集会で行った帰国報告のスピーチでは、日本とカナダの生活習慣や学校生活の違いを体感できたこと、日本人や日本文化の特性について再認識することができたこと、また自分自身の高校生活や卒業後の進路について改めて深く考えるきっかけになったことなどを、しっかりとした口調で同級生たちに話していました。その話しぶりからは、今回の交換留学によって、この生徒が大きな自信と活力を得たことを強く感じました。その自信と活力によって、この生徒の今後の高校生活、さらには今後の人生がより輝かしいものになれば何よりです。

　最後に、この度の交換留学促進事業の運営にあたり、ご尽力頂いた関係者の皆様方に感謝申し上げます。

平成３０年度北海道・アルバータ州高校生交換留学促進事業報告書

北海道札幌国際情報高等学校　教諭

１はじめに

本校は国際交流を一つの柱として様々なプログラムに関わり、生徒の多角的な視野の育成に力を入れています。米国姉妹校の交流や AFS 留学生（フィンランド・イタリア）受入といった長期にわたる国際交流活動から、世界・アジアの架け橋事業（韓国済州・パラオ)、台北市教員・ロシアサハリン団体受入などの短期的なもの、また来年度から新たに始まるロシアノボシビルスク国立工科大学付属学校との交流計画や「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム」へ留学者７名の指導など、国際交流部担当教員をはじめ学年・教科の協力の下で行われています。「北海道・アルバータ州高校生交換留学促進事業」も国際交流活動の大切なプログラムの一つであり、毎年多数の応募者の中から選考・応募し、今回もこのような形で北海道教育庁より支援をいただきました。

２アルバータ留学生受入準備として

学校側からの留学生との接触は、来日前に本校の学校ガイダンス（英語版）を留学生宛にメールで送りました。「本校制服を着たいか、部活動に興味はあるか」などの細かなやりとりなどは本校派遣生徒に任せ、来日前から両者の関係を築いておくような方法をとりました。今年度やってくる Paige は本校制服を着たい本校生徒を通じてリクエストがありました。運良く卒業生から借りることができ、本人も大変喜んでいました。土曜日に来札して日曜日はゆっくりしてもらい、月曜日から早速登校になりました。

３授業のカリキュラムは

在籍する生徒のクラス授業に準じて作成します。配慮したポイントは以下の通りです。アルバータ側引率者側の意向を組む形になっています。

⑴英語の授業を入れざるを得ないその場合、授業中の日本語学習を可とする。
⑵一日に自習の時間及び日本語の授業（AFS 長期留学生と同じ時間帯）を入れる。
　英語で話す生徒がいることによりストレスが解消される。
⑶週に一度ＡＬＴによるカウンセリングの時間を入れる。
⑷他学年の授業に参加し、友人の幅を広げる。
⑸書道・美術・体育・家庭などの手作業ができる授業を多く入れる。

日本語授業は私が教えました。ページの在籍する高校は自己学習スタイルが確立されている学校でしたが、本人の学習意欲は非常に高く、授業の説明もほぼ日本語で説明しても理解できる能力を持っていました。ファーストフードのチラシ広告を使った会話練習をはじめ基礎レベルの漢字の学習など、ページの日本語能力は向上していきました。

４学校行事や授業、クラスメートとの交流を通して

校内での主立った行事は「留学生歓迎会」、「体育大会」及び国際文化科行事である「イングリッシュキャンプ」でした。イングリッシュキャンプにおいては、北海道大学に在籍する留学生が紹介

する諸国の事情について本校生徒に混じって学習する姿が見受けられました。また普段の「英語表現」の授業においては、本校生徒２名と組み、ハワイの諸問題（白人とアジア人の人種差別について）を日本人生徒は英語で、ページは日本語にてパワーポイントを使用してプレゼンテーションするなど、協働作業を通して生徒との関係を縮めていきました。クラブ活動にも積極的に参加し、特に華道部では講師の先生の指導を受けながら本人の持つセンスをいかした生け花を披露するなど、充実した学校生活をおくっているようでした。

ページとのお別れは本校見学旅行出発日の千歳空港でした。見学旅行に同行することができないページは親しくなった友人たちと空港で見送る立場になり、一緒に写真を撮ったり、ハグしたりしてそれぞれにお別れをしていきました。セキュリティーゲート前では目を真っ赤にして泣いているページを本校ホストファミリーのお母さんが抱擁している姿も見受けられ、ページにとって有意義な海外生活体験ができたかなと思っています。

５本校生徒の留学事前指導は

海外留学する生徒たちが帰国して開口一番にいうのは「留学は甘くはなかった」ということです。現地高校での授業が聞きとれない、生徒同士の会話に入っていけない、教室にて一人でいることが多かった、ホストファミリーと通じあえなかったなど、思い描いていた生活とは異なる場合があることを肝に銘じる必要があります。現地学校においてもパートナー生徒と良好な関係を続けながら留学生活を送るためには、日本人生徒がアルバータ留学生を受け入れる８月からすでに始まっていることを認識させ、留学生が日本の学校にてさびしい思いをさせないという配慮も大切だということを教える必要があると思われます。

６おわりに

アルバータの留学生が「２ヶ月間有意義だった」と思うようなサポートをすることはもちろん、日本での留学生活が今後の人生に役立つことがあればと思いこの事業に取り組んでいます。また我々学校側が真摯に取り組んできたことをアルバータ留学生が現地の学校に持ち帰り、翌月から本校生徒がアルバータで留学中に現地の学校にてバックアップしていただきたい、そういった気持ちもあります。北海道高校生とアルバータ留学生とのマッチングは難しい場合もありますが、今回も相互の留学が成功したのは、全面的にサポートしていただきました北海道教育庁学校教育局の御担当者様をはじめ、引率していただいた先生、またホストファミリーの方々のお力によるものです。双方の高校生が将来この留学を振り返ったときに支えてくれた方々のことを思い出した時、私たちがこの事業に携わってよかったとようやく思えるのかもしれません。

北海道・アルバータ留学促進事業の留学生が本校にもたらす効果について

北海道千歳高等学校　教諭

１．はじめに～「国際交流が盛んな学校」として

本校は国際流通科、国際教養科、普通科の３学科を抱え、米国の高校交流や、24 年間続いている韓国に姉妹校と毎年相互訪問するなど、学校生活に国際感覚、異文化コミュニケーション・外国語運用能力を伸ばす機会を多く設けている。また、台湾への見学旅行、台湾の高校生の教育旅行受け入れ、国際教養科の海外語学研修、JENESYS2018 など、生徒が積極的に海外に出向く機会のほか、千歳科学技術大学、JICA、米国総領事館や韓国総領事館とのタイアップによる講演や特別講義を行っている。

本校の生徒は各種プログラムの機会は非常に充実しているが、本事業のように、留学生を約３か月本校の生徒としてクラスで受け入れることは、日常生活で起こりうる異文化体験の機会、日本の生活、習慣や文化を伝える機会として、非常に価値がある。クラスの一員としてカナダの生徒を受け入れ、臆せず、親切に、時に文化の違いからくる衝突や障壁を乗り越えていく機会となっている。

２．本校生徒にもたらす効果～授業への参加と国際交流への効果

留学生のウィリアム・レスリー君（リアム君）は、出身のストーニープレーン市と姉妹都市である鹿追町のプログラムで来道したことがあり、以前から日本語を学んでいたため、非常に高い適応力で２か月の滞在を無事終えることができた。留学期間中、北海道胆振東部大震災で学校が休校になり、停電、断水のため、小学校で避難所を経験したこともあったが、休校明けは元気に登校し、体験を語ってくれた。

日本の漫画好きで、カナダの学校で漫画研究部に所属するという彼は、日本語をアニメや漫画から得ているようで、時々周囲を驚かせた。「大学で文化人類学を学びたいので、アイヌの文化や日本の生活や歴史にとても興味がある」と話し、アイヌの少女を題材にした『ゴールデンカムイ』も愛読しており、アイヌ語や、時代背景もよく知っている。また、石ノ森章太郎の作品が大好きで、『仮面ライダー』シリーズをすべて言え、仙台の石ノ森章太郎記念館にサプライズで連れて行ったもらい、非常に感激していた。

本校のパートナー生徒は国際流通科に所属しているため、商業科目が多く、必ずしもすべてリアム君の希望のものではなかった。当初、２ 週間ほど、クラスメートや授業に慣れることを目的に、クラスで授業を受けてもらったが、日本語能力が限られていること、日本語をメインに学びたいことから、担当教員が日本語指導を行うことにした。わかりやすい日本語を使い、未習の文法項目を入れ、表現や作文を練習した。その中で、特に、担当教員と日本の生活の習慣とのギャップについて話すことを楽しんだ。

本校国際教養科や普通科の授業で、極力多くの生徒と接する機会を設け、カナダについて話をしてもらった。授業で意気投合して食事を一緒にするなど、多くの生徒がリアム君との会話を楽しんだ。しかし、どこに行っても特別扱いされることにやや違和感を感じ、「普通に扱ってほしい」と漏らすこともあった。これは、受け入れる本校生徒の方がある意味過剰に特別ゲスト扱いしているた

めで、パートナー生徒がカナダで感じた、「かまわれないこと」と正反対であり、こちら側が親切心でやっているにせよ、こちら側に多様性が少なく、留学生が過剰にスポットを浴びてしまうとことから来るのだろう。

３．本校生徒のカナダ滞在について

日本で先に３か月間生活を共にしたのは、本校のパートナー生徒にとってはとても大きなアドバンテージである。日本とカナダの両家族間の交流があり、カナダとパートナーについて事前に知ることで、渡航に関して大きな安心感を得たようだ。本校のパートナーの言葉を借りれば、「（留学生だからといって）誰も私に興味を持っていな」く、孤独感を感じたのは、日本の生徒が留学生をちやほや注目するのに対して、カナダの学校では留学生や最近カナダに来た生徒などは珍しくないため、本校生徒が期待したような扱かわれ方ではなかったようだ。しかし、その特別扱いへの期待や依存心を取り払い、「自分から何かしなければ、何も始まらない」と、自ら行動し始めたことにたくましさを感じ、その姿勢こそが留学を自分の手で成功させるものだと感じたようだ。すべてお膳立て、先回りして、失敗させない、傷つけないように準備されるようなことのない、「タフな環境」こそが、留学の醍醐味でありチャレンジである。そのために英語力はもちろん異文化理解力を身につけるのが本来の姿だと考える。

本校生徒のレポートによれば、カナダで家族との関わりから、「察してわかってくれることや言わなくても気づいてくれるから言わない」コミュニケーションではなく、「きちんと気持ちを伝えないとわかってもらえないから言葉にする」術と必要性を学んだようだ。また、「他人がどう思うかに縛られて萎縮する環境」から、「他人がどう思うかは別問題だ」と思うことにより自信と主体性が身についたようだ。これは、私としては当然のことであるが、集団主義傾向が強く、以心伝心や察しで物事が進んでしまう日本の学校現場では、なかなか経験させられないことかもしれない。

３．今後のこの事業への関わりについて～「トビタテ！留学 JAPAN」を参考にした選考

このような、本校生徒の温かい受け入れと支援の姿勢や、本校の国際交流推進の校風を大切にし、今後も本校生徒の興味関心の向上と多文化共生マインドの醸成のために、改善を重ねながら受け入れ態勢を今後も整えていきたいと考えている。特に「トビタテ！留学 JAPAN」の募集・応募方法を参考にして、この交換留学促進事業に応募する上で、カナダで何をしたいのか、留学生に何を伝えるのかという明確な目標をもってもらうよう指導すること、現地で日本を伝えることを明確にする「アンバサダー活動」、帰国後その意義や成果等、体験を伝えて周囲によい影響を与える「エヴァンジェリスト活動」を明示してもらうことなど、より多くの生徒に効果とインパクトがある国際交流事業への関わりを目指していきたい。

今回の、参加生徒が今後も本校内外で、このホームステイ受入とカナダでの体験や気づきを多くの生徒や地域の人々と共有してもらえる仕組み作りをしていきたい。

おわりに

今回の本事業も、一般的に想定内で起こりうる、生徒の異文化適応やコミュニケーションに関する小さな困難はあったものの、大きな成果とともに無事事業を終了することができ、その困難は「ト

ラブル」ではなく、「チャレンジ（やり甲斐のある困難）」だと思える。留学生がさらに多くの本校生徒と関わる機会を持ったことで、本校生徒の異文化理解力と異文化コミュニケーション力が大きく増進したことが大きな成果だった。今後も本校生徒に同事業に積極的な参加を促し、成果を共有する体制を整えていきたい。

最後に、募集から事後報告まで連絡調整をいただいた北海道教育委員会、アルバータ州政府教育省、相互のホストファミリーの温かい受け入れとご支援に感謝申し上げ、報告といたします。ありがとうございました。

平成30年度高校生交換留学促進事業に係る研修報告書

北海道苫小牧東高等学校　教諭

１　本校における交換留学生の受け入れについて

本校は、国際交流や海外留学について積極的に奨励してはいないが、国際交流や海外留学に関心の高い生徒が、個人的に長期休業を利用して海外に滞在したり、親とともに旅行をしたりする程度である。記録によると本事業による交換留学生の受け入れおよび派遣は平成２４年に一度行われており、本校にとっては数年ぶりとなる当事業への参加である。それ以前の参加も複数年の隔たりがあるので、本事業に関しては、数年に一度のペースで参加していることになる。

今年度の事業を生徒に周知した際にも、募集期間が短かったため、応募があると予想してはいなかったが、現実には２年生から２名の応募があり、留学に対する意識が高いことがうかがわれた。応募者のうち１名が選考され、在籍学年が中心となって準備を進めることとなった。

２　受入準備

上記の通り、毎年のように事業に参加しているわけではないので、本校として、交換留学のノウハウが確立されておらず、手探りの状態で準備が始まった。

準備段階で最も気にかかったのが、２学年の行事として受入期間中に実施される見学旅行への参加であった。日本を代表する観光・歴史地区を巡る旅行に、留学生が参加することは大きな意義のあることだと思われるが、参加には少なからぬ費用もかかり、保護者には大きな出費となる。こちらから強く勧めることはなくとも、旅程詳細と費用の詳細について説明し、理解を得て参加意思を確認するのに、多大な時間を要した。また、旅行費用の支払いについても、何度かメールによるやりとりを必要とした。

３　受入

８月１８日に千歳空港に到着したＺｏｅは、控えめな態度のおとなしい学生であった。学校生活は、翌週月曜日に生徒会主催の体育大会を見学することから始まった。最初の２週間はパートナーと同じ教室で同じ授業を受けることを勧めたが、理数系の科目は授業内容についていくのが難しく、それらの時間は他学年の芸術科目（書道）を受講させるなど柔軟に授業の組み替えを行った。このほか、日本語の学習時間を確保するために、図書室を利用して自習を進めつつ、理解しづらいところは学年の教員が指導にあたる体制を整えた。ＡＬＴにも協力を要請し、日本語を学習する際のアドバイスなども受けられるようにしたが、系統立てた指導をすることが難しく、日本語教育に詳しい教員もいないため、Ｚｏｅは日本語能力の向上に対して不安を感じていたのではないかと思われる。留学期間中の日本語指導に関する準備は十分でなかったことを反省した。１か月を過ぎる頃になると、Ｚｏｅは興味のある書道に積極的に関わるようになり、書道部の生徒と放課後の時間を過ごしたり、茶道部の活動を見学したりするなど、少しずつ積極性も見えてきた。

見学旅行に際しては、集団行動をする場面と、個別に行動する場面とを組み合わせ、本人にとってストレスの少ない旅行にすることができたようである。教員もそれに合わせて配置した。日本の

歴史と平和について興味深く研修することができた。
　ホームステイ期間中、ホストファミリーおよびパートナーと上手にコミュニケーションをとることができずに悩んだ期間もあったが、最終的にはよく話し合って理解を深める一歩を踏み出すことができたようであり、明るく日本を離れていった。

４　派遣生徒
　生活習慣や考え方の違いを、頭で理解する以上に実生活のなかで受け入れることができるかどうかが生徒の心配の大きな部分を占めていたようであり、カナダへ向けて出発する前はずいぶんと悩んだようであるが、決心して出発すると大きなトラブルもなく、期間を全うすることができた。滞在期間中は、特に食事について、自分が持っていた常識と違うホストファミリーの考え方に驚くなどの経験をして、常識について考えさせられたようである。
　当人は、３か月といういわゆる短期間で自身の英会話能力がどれだけ向上したかについて懐疑的であるが、この交換留学を通して体験したこと、考えたことが有形無形の糧となって、彼女の国際感覚が醸成され、学力、英会話能力の向上、ひいては人格の陶冶の一助となることを確信している。

５　まとめ
　今年度、数年ぶりに本校生徒が本事業に参加することとなった。過去の資料をひもときながら準備を進め、カナダからの学生の受け入れ、カナダへの派遣の課程を経て、とにもかくにも終了を迎えようとしていることに安堵している。受け入れに際し、本校が準備しておくべきだったこと、受け入れ期間中および派遣期間中にすべきことなど、多くのことを考えさせられ、受け入れ学年としても貴重な学びの機会となった。
　本事業の初めから終わりまで、あらゆる場面でアドバイスと支援をいただいた北海道教育庁高校教育課のスタッフの方々にあらためてお礼申しあげます。

平成３０年度北海道・アルバータ州高校生交換留学促進事業に係る報告書

北海道登別明日中等教育学校　教諭

１　本校について

道立唯一の中等教育学校である本校は、開校以来１２年間、多くの特徴的な教育活動を行っています。特に国際理解教育については、１回生次から時間割に ALT２名による英会話授業を組み込み、２回生次に管内・管外から多数の ALT と共に１泊２日の「イングリッシュキャンプ」、３回生次には見学旅行を兼ねた福島県のブリティッシュヒルズでの語学研修、４回生次では２日間の予定で近隣の小学校へ生徒全員が英語講師として授業を行う総合学習、５回生ではその集大成としてカナダ・アメリカでの海外見学旅行など、様々な取り組みが行われています。さらには平成２２年にはユネスコ・スクールの指定、平成２６年度には「スーパーグローバルハイスクール」の認定を受け、オーストラリアの高校とのテレビ会議や海外フィールドワーク、各種国際フォーラム等への参加等、生徒が海外に興味関心を持ち、実際に海外に出ようという意欲を高める多くの機会があり、進路先に海外をめざす生徒もおります。本事業については、今年度は３年目にあたり、４名が応募し、昨年度に続き１名の生徒が決定しました。

２　事前準備

本校にある国際理解教育推進委員会の管轄の下に、今年度は４回生（高校１年相当）の英語主担当の教員がメインで、前年度の担当者との情報交換を重ね、所属の学級担任及び学年団との連絡調整を行い、事前の受け入れ体制に動きました。また日本語指導については前年度使用した教材を参考に、指針を確認し、時間割作成、特に面談の時間、及び自習時間を確保するよう留意しました。また留学生とのメールのやりとりや道教委、ホームステイ先との連絡調整にもあたりました。バディとなる生徒についても留学生と来日前の連絡をしっかりと取ることを確認していきました。本校に登校後はできるだけ数多くの生徒、教員と触れあえるようにと、配置学年以外のクラスへの授業参加や英語科教員以外との面談等を意識しました。留学生本人は受け入れ学級の女子生徒達と夏休み中に「ライン」や「インスタグラム」を通じてある程度の交流はありました。

３　留学生の受け入れ

今年度の交換留学生であるアミリア・ビーゾンは地元カナダでの日本語スピーチコンテストで代表に選出され、東京及び愛媛の世界大会に参加するため７月下旬にから来日しており、本校にくる前日まで喜茂別町の農家の方の家にホームステイしており留学開始以前から日本に滞在しているため、本校での生活にもすぐに順応すると思っていたのですが、性格的にかなり引っ込み思案で、当初はほとんど自己主張せず、本校 ALT に対しても、ほとんど反応することなく、学級担任、英語教師からの問いかけにもジェスチャーのみの応答が多く、主担当の英語科教員を除いては、日本語・英語共に大人とはほとんど会話しないことが多いという状況でした。その後カナダからの担当者の来校がきっかけとなり、堰を切ったように話し出してきたことがあり、そこから少しずつ話すようになっていきました。また、同時期にタイと韓国からの長期の留学生も来校し、特にタイの留学生

は女子であったため、彼女との交流がアミリアには非常によい効果があったと思われます。クラスの生徒たちや部活動（美術部に参加）の生徒達とは明るく話し、ラインを送り合ったりしているようでした。ホストファミリーからも当初は、ほとんど会話がない、食事をほとんど食べないとの連絡もあり苦慮しましたが、休日を利用して、家族で出かけたり、外食したりしていくうちにかなり打ち解けていったようです。

授業については、毎週担当者が本人の状況から判断して、時間割を再編成してアミリア専用に週末に翌週分を渡していました。なるべく多くの先生方と接してもらいたいという考えから、最初の１週間は生徒達と全く同じ時間割でバディの生徒の横で授業を受けてもらいました。２週目以降は本人の意向を確認して、自習時間、面談、日本語学習も取り入れて時間割を作っていきました。また来校１日目から日誌を渡してそれを毎朝登校時に前日分を主担当の教員に提出し、教員が確認後にメッセージをいれて返却するようにして、参加した授業への意見を確認することができたので、それも時間割作成の資料にしました。アミリアには英語の授業（コミュニケーション英語Ⅰ・英語表現Ⅰ）、国語総合、芸術（美術）、体育、ロングホームルール、総合学習、学校行事を中心に時間割を組んでいくことと、他学年のクラスでの授業参加及びカナダのプレゼンターションを実施する旨を事前に伝え、少しずつ他の教科にも慣れていったようです。（理数系と社会系はもともと苦手のようでしたが）

日本語学習については週に２～３回程度、教員と１対１で別室で実施しました。主担当の英語科教員がメインで指導し、他の英語科教員の協力を得て、昨年度使用した教材及び本人が持参した教材等を使って行いました。日本語スピーチコンテストのカナダ代表ということだったので、相当な日本語力を期待したのですが、基本的な日常会話についてはほぼ問題なくこなせましたが、熟語と漢字が非常に苦手で読み取り、書き取りには苦労していました。

本校での滞在中、部活動、体育祭、小学校での英語授業の講師、芸術鑑賞、ボランティアのツアーガイド経験など様々な行事に参加し、友人も増え、アミリアにとっては貴重な２ヶ月となったと思います。

４　本校生徒の渡航

アミリアの帰国後、１１月から本校生徒が交換留学でカナダに旅立ちました。保護者はかなり心配していましたが、本人は英会話にかなり不安感を持っていたようでしたが、現地のポールケイン高校ではすぐに友人もでき、また日本とは全く異なる設置科目、授業スタイルを存分に楽しんでいたようです。保護者や日本のクラスメート達とは「ライン」を通じて情報交換ができていたので、海外での生活の不安はかなり解消されていたようでした。今回の貴重な経験を是非、次の学年に伝えるべく努力するように本人には伝えました。本人はリスニング力はかなりついたと言っていましたが、ネイティブ達の中に発話していくことが難しかったと振り返っています。今後の課題です。

５　最後に

本事業に参加して３年目となりましたが、本年度も、北海道教育委員会高校支援グループの方々を始め、関係各位の方々のご尽力により、生徒ばかりでなく、我々教員にとっても貴重で有意義な経験を得ることが出来ました。今後も是非積極的にこの機会を活用していきたいと考えております。

平成３０年度北海道・アルバータ州高校生交換留学促進事業に係る研修報告書

北海道浦河高等学校　教諭

１．事前準備

アルバータ州からの留学生が決まってから、日本人のパートナーと留学生は頻繁にメールで連絡を取っていました。本校からは、制服があるが私服で通学して構わないこと、上靴が必要になるといった基本的なことだけを本人に知らせました。留学生の高校に連絡を取ることはありませんでしたが、彼女の日本語の能力やどのように日本語を教えているかなどを問い合わせたらよかったと思いました。留学生は制服を着たいとパートナーに伝えていて、受け入れ家庭で卒業生にお願いして制服を貸してもらうことができました。

２．授業について

受け入れ経験のある学校の先生方の話とアルバータ州の引率者の意向を参考に、以下のことを意識して時間割を組みました。

①パートナーと同じ授業ばかり入れない。

②英語の授業はなるべく入れない。

③多くの生徒と関わるように他学年の授業も入れる。

④毎日１時間、日本語の学習のための自習時間を入れる。

本校は毎週時間割が変わるため、金曜日に翌週の時間割を決める時間を持ちました。その中で、受けた授業についての感想を尋ねたり、他に受けたい授業がないかを確認しました。書道をやらせるとよいと聞いていたのでやらせたところ、大変気に入り１，２年生の書道の時間に毎回のように参加していました。数学は苦手でやりたくないと話していましたが、日本語が分からなくてもある程度理解できるということでパートナーと同じ数学の授業を受けました。英語の授業については、私が担当する３年生５人の選択授業に毎回参加してもらったところ、居心地がよかったとのことで毎回参加しました。その中で２グループに分けてスキットを考えさせて演じさせたことが印象に残っています。最初はコミュニケーションがぎこちなかったのが、次第に楽しそうに話の内容を決められるようになっていきました。その中の一人は今も留学生とメールのやりとりをしています。

３．日本語指導について

自習の時間は、本校にある英語で書かれた日本語の教科書を使いました。本人の希望で、勉強して分からないところを質問するという形にしました。私が担当したときはいろいろな話をするように心がけました。日本語に自信がなく、不安やストレスを感じているのではないかと考えたからです。最初は英語で話すことが多かったのですが、これではいけないと思い、まずは日本語で話して、分からなければ英語で話すようにしました。さまざまな質問に答えたり世間話をしました。本校にはＡＬＴがおり何度か留学生と話す機会がありましたが、定期的に話すことはなく、その必要もないようでした。最後の週は、いろいろな授業に出たいということで自習の時間をやめました。

４．部活動・学校行事への参加

弓道部の練習に参加しました。他には何度か茶道部の練習にも参加しました。学校行事としては９月に体育祭があり、クラスＴシャツを着て競技に参加しました。とても楽しかったと話していました。最後の日には全校集会を行いました。生徒会長が英語で挨拶をして、これからカナダに留学する本校生徒が意気込みを英語で話しました。留学生も日本語で挨拶をしました。その日の放課後は、名残惜しそうに遅い時間まで生徒と写真を撮ったり話をしたりしていました。

５．学校外での生活について

受け入れ家庭が小樽、函館、登別などに連れて行ったと聞いています。行った場所について楽しそうに話してくれたこともありました。週末にパートナーが部活動で不在にするときは、もともと一人でいることが好きということもあり、家でのんびり過ごすことが多かったそうです。

また、９月６日の胆振東部地震とそれに伴う停電が発生したときには、不安になって帰りたいと言うのではないかと心配しました。受け入れ家庭にメールで確認したところ、地震が発生したときはパートナーと机の下に入っていたそうですが、その後は空を見て星がきれいだと言っていたと知り安心しました。

６．おわりに

留学生とパートナーは言葉が通じないことがあっても常に相手のことを気遣っていると言動から感じられて、見ていてお互いの留学がうまくいくだろうと確信できました。実際、特に問題などはなかったと聞いています。

また、留学から戻った本校生徒と話をして、２カ月間の経験が彼女にとってとても意味のあるものだったのだと感じました。カナダで出会った高校生は将来のことを考えていて、自分で判断して行動していることが印象的だったと話していました。英語だけではなくさまざまなことを学んだことで、これからの人生によい影響を与えるだけではなく、周囲に対してもよい影響をもたらすものと期待しています。本校に来た留学生にとっても、今回の日本での経験がこれからの人生で何らかの形で役立つことを願っています。

最後に、本校でのこのプログラムを行うにあたりご支援、ご協力いただいた北海道教育委員会の皆様、両国のホストファミリーの皆様に深く感謝申し上げます。

実り多い留学プログラム

北海道函館中部高等学校　教諭

無事に交換留学を終え、充実した時間を過ごせたことを、まず企画・運営いただいた関係各所、御担当者、カナダ側の高校の先生方、双方のホームステイの御家庭、そして留学生の２人に感謝申し上げたいと思います。学校側の担当者として新しく学ぶことも多く、良い経験になりました。

今回は４年連続でのプログラム参加になりましたが、受け入れた生徒は、気さくな性格で、新しいことに挑戦しようとする意欲を持ち、日本語の勉強にも熱心に取り組むという素晴らしい生徒だったので、本校生徒達にとっても英語学習だけではなく、異文化理解に対する姿勢、努力し続けることの大切さをも学ぶことができた良い機会となったと思います。日本の文化や習慣も学ぼうと、生け花や剣道など、本当に楽しそうに活動している様子は、日本という国に興味を持ち、出来るだけ吸収しようという雰囲気を感じさせ、私達自身も日本の良さについて改めて考えさせられました。また、留学開始前日に頭髪についての本校の方針や生徒の様子を話し、柔軟な発想を持って理解し行動してくれたことは、特に留学担当、受け入れを担当する英語科として感謝するところでした。

本校の留学生も、将来の職業を見据えた英語力の向上と英語圏で生活する貴重な経験を切望しこのプログラムに参加しており、カナダの高校の授業だけではなく、日常生活、さらにはバスケットボールクラブの活動に参加し遠征も経験するなど、充実した時間を過ごすことが出来たようです。カナダへの留学は、受け入れていたカナダ側の留学生が待って居てくれるという安心感があるということもあり、気持ち的にも落ち着いていたようにも思います。

このプログラムの良い点の１つは、留学生徒が違う言語習得を目指しながらも、お互いに異文化を理解しながら、サポートし支え合っていくというプロセスにあると思います。さらに、日本で何をやりたいか何を目標としてのカナダ留学なのかという目的意識を明確に持っていることが、時間を有効に使い本人の充実した留学生活に結びつくことになるのだと思います。このプログラムを始め留学を志す高校生の皆さんには是非明確な目標を持って臨んで欲しいと思います。

１　募集

留学への興味関心が高い生徒も多いため、特別な説明会・ガイダンスは実施せず、教室へのポスター掲示によって周知し、関心のある生徒は担当者を訪ねることになっています。相互に留学生を受け入れるという条件のため、出願者数は多いわけではありません。

２　受入れ準備

本校では、このアルバータ州との交換留学を含め、留学全般については時間割作成から、ＨＲ教室への配置、他教科への留学生の授業参加依頼など全てに渡り、英語科が担当しています。４年連続での受入れなので、英語科教員の１人１時間の日本語レッスンなどのサポート体制はもとより、ＨＲ担任や他教科へのカナダ側留学生の授業参加や教科書用意の依頼などの手順も整っておりスムーズに受入準備ができたと思います。特に、担任の先生や他教科の先生方が快く引き受けてくれたことが、時間割作成の際にも大変大きかったと思います。また、１年生の授業以外にも学年を超え

ての授業参加もあったため、急に一緒に留学生と勉強し、活動してくれた他学年の生徒達の協力も大変大きかったと思います。何事でもないように普通に外国から来た初対面の生徒と話している姿は頼もしいものです。

留学生同士は SNS やメールなどを使い、事前に情報交換することが出きていたようで、特に対処しなければいけないことはありませんでしたが、留学生同士が留学に十分準備して臨める結果になったと思います。

３　留学期間

⑴ガイダンス

担当者が初日の最初の時間に設定し説明を行いました。時間割の希望や部活同への参加希望について聞き、時程、昼食、校則、服装（本校は私服）の説明、校舎案内、常駐ＡＬＴ紹介等実施しました。登前日に学校に来てくれていたので、初日の教職員への挨拶についても説明ができ、パートナーから日本語レッスンを受けながら無事こなしてくれました。

⑵教科・科目選択

担当者と相談し英語以外の教科を中心に要望を考慮して計画する予定でしたが、日本語の理解度が把握できなかったことや、実際に授業を受けてみての感想を元に組み立てることとし、とりあえず全教科について最低１時間は体験してもらうことにしました。金曜日の最後の授業を担当者との日本語レッスンと面談にあて、本人の理解度と希望を考慮して第２週目以降の基本時間割を作成しました。LHR・体育・音楽は所属ＨＲクラスで、家庭科は３年選択授業へも参加しました。日本語は週８時間（担当者２時間＋他英語教諭６時間）。また、毎日１～２時間の自習や空き時間を設定しました。

⑶自習場所

図書室と ALT 室をいずれも使用可能としました。ALT とも日常的に話すことができ相談や疑問解決に役立ったと思います。

⑷日本語指導

テキストは、漢字の書き方や日本語表現などの日本語学習のテキストが何冊かあり、その中で本人とも相談の上使ってもらうことにしました。しかし、日本語指導の際には、そのテキストのみを扱うのではなく、日常生活で気になった日本語や、話をしていく際に気づいた表現や文法などを取り上げて臨機応変に行いました。友人やホームステイ先の家族との会話でうまく言えなかった表現なども尋ねて実施したことから、文化の違いなども話題になることもありました。

英語科教員の中では、指導した内容や触れた話題などをノートに簡単に記録し引き継いでいくことで、前時での内容確認なども行うことができ、現在の学習内容が全員共通理解できるようにしたことが良かったと思います。

⑸カウンセリング

週８時間の日本語指導の中で、さまざまな相談にも対応しました。ＡＬＴ（２名常駐、内１名は同じカナダ出身）を紹介し、様々意見交換をしていたようで、本人のリフレッシュにもなっていたようです。

⑹学校生活

・炊事遠足に参加。（雨天のため学校の駐輪場での炊事になりましたが、楽しく参加していました）
・１年生の学校行事（英語スピーチコンテスト）で、自国と日本の違いについてプレゼンテーションを行いました。
・学年を越えた授業選択も、楽しく参加できたようで特に問題はありませんでした。
・部活動参加は一つに絞らずに興味のある部活であれば複数の部活動を体験することを勧め、音楽（合唱）部、剣道部、文化系を中心にいくつか体験しました。
・学校行事（体育大会）も、生徒の一人として集団に溶け込み、バスケットボールでは男子にもディフェンスを指導するなど中心的な役割を果たしました。
・学校外でも生け花教室に通い活動していました。

４　本人と生徒の変化

〈カナダ側留学生について〉日本語だけではなく日本文化にも興味を持っていたことで積極的に人と話そうとする生徒だったので、友人との交流が増え充実した日々を送ることが出きたと考えます。

〈周囲の生徒について〉留学生を迎えるＨＲクラスには、担任の先生から、また英語の授業において宣伝をしてもらいました。外国の生徒と学校生活を送れると楽しみにしている生徒が多かったように思います。数週間後のカナダ側の留学生からの感想を聞くと、結構恥ずかしがっていてまだ話しかけてきてくれない生徒もいるようでしたが、同じクラブや趣味などで話しかけやすい生徒とそうでない生徒もいたようです。本校生徒に変化があったかどうかについては、まず異文化を持つ生徒との学校生活を送れたこと自体が、自分について再認識し、休み時間に英語が使われていることが語学に触れるということなどを合わせて考えると大きな影響を与えたことは間違いないと考えます。

５　北海道側留学生の変化

留学前から、充実した生活を送り勉強してきたいと準備してきた生徒だったので、十分な成果が感じられ、帰国後もさらに英語の勉強を頑張っていこうという姿勢が感じられます。英語を使わなれければ生活できない場に身を置くことで一回り大きく度胸もさらにパワーアップした印象があります。本校で所属するバスケットボール部への活動へも参加することで、帰国後もスムーズに部活動に復帰しておりチームにさらに貢献してくれると確信しています。

６　課題

カナダの高校と日本の高校の頭髪服装に関する校則についての認識が違うので、受け入れ前に明確にして理解を求めることが必要だと感じました。本校の規定は、「本校生徒として品位を保つもの」という内容で細かい記載はありませんが、生徒はどのようにするのかを判断し、儀式などの服装を考え、頭髪についても考え行動することになっています。頭髪を染めることが自由なカナダとの違いをどのようにしていくかが課題と考えます。今回は、カラフルだった色を自分の地毛の色に戻してもらうよう話した（黒色に染めるようには話していない）だけですが、美容室で相談して色を決め学校生活に臨んでくれました。

また、日本語指導の専門家ではない教員側も日本語を教えながら改めて日本語の文法などにも気づくといったこともあり、系統的な指導ではなく、留学生が困っていたり、必要としている日本語を中心に行っている現状があります。それはそれで、ニーズに応える日本語指導になっているので良いとは思うのですが、留学生の日本語レベルに応じて対応していくことが必要と考えます。

最後に、冒頭にも申し上げた、企画・運営いただいた関係各所、御担当者、カナダ側の関係機関、お世話になった高校の先生方、双方のホームステイの御家庭、２人の留学生、関わっていただいた全ての方々に感謝申しあげ報告とさせていただきます。

平成３０年度北海道・アルバータ州高校生交換留学促進事業に関わる研修報告書

北海道旭川北高等学校　教諭

１　はじめに

本校はこの交換留学プログラムに参加させてもらうのは２年連続となり、さらに今年度は２名のアルバータからの留学生（エイミーとアビー）を受け入れることとなった。昨年度の留学生は残念ながら体調不良のため、予定よりも早期に帰国をすることとなったが、今年度は二人ともとても元気に、そして積極的に日本での生活を楽しんでくれた。また、昨年度の経験やこれまでの留学生受け入れの実績があったため、比較的スムーズに留学生を学校として受け入れることができた。

２　事前準備

在籍クラスは日本人パートナーと同じクラス（２年生）。学校生活のことや基本的なルールについては、来校初日に本校のマニュアルを使いながら一つ一つ丁寧に説明した。また、本校の２学年から新制服になったことから、事前にサイズを聞き、業者の協力もいただきながら２人分の制服を用意した。留学生は日本の制服への憧れもあったことから、とても気に入ってくれた。留学期間中には本校の見学旅行もあるため、本校の担当教員とアルバータの留学生の両親とメールでやり取りをし、参加の有無や費用のことを確認した。

本校の体育大会は夏休み明けすぐにあり、クラスごとに個人の名前と番号が入ったチームユニフォームを作って参加するのが恒例となっている。今年度の２人の留学生にも７月中に希望する名前と番号を聞いておいた。登校初日にクラスメートから手渡されたとき、２人ともとても喜んでくれた。

３　授業について

授業は主に実技科目（体育、芸術、家庭科など）と英語（コミュ英、英表、選択の英語授業）に参加した。本人達の希望により、芸術は書道、音楽、美術すべてに参加した。とくに書道では覚えたての漢字を書いたり、書道の先生のサポートにより自分の名前を漢字で書いてみる体験ができ、思い出深かったようだ。また２人とも美術の能力が高く、他の生徒からも賞賛されるほどの腕前を見せた。

英語の授業に関しては自分のクラスにはできるだけ参加してもらい、同年代のネイティブの英語を間近で聞き、本校生徒たちに大きな刺激となった。「留学生と英語で話したい」と、学年に関わらず英語で話しかける本校生徒もおり、英語学習への意欲にも繋がった。

英語の授業でピカソが描いた「ゲルニカ」を取り上げたレッスンを扱った。見学旅行の行き先である長崎での平和学習を控えていたため、カナダの戦争の歴史と、カナダから見た原爆投下について、調べた内容や自分の考えを英語でプレゼンしてもらう機会があった。このように、教科書には載っていないような文化的・歴史的背景を説明してもらったり、あるトピックについて我々にはなかなか思いつかない意見や理由をクラスで共有させてもらったりできたのは、とても有意義なことだった。

４　学校生活・学校行事

夏休み明けから１０月半ばまでの行事に関してはすべて参加してもらい、日本の高校生活を体験してもらった。最初の行事だった体育大会ではクラスメートと同じユニフォームを着て、競技に参加するだけではなく、みんなとクラスの応援をしてもらった。この行事のおかげで本校生徒との距離が縮まり、すぐに友達や学校生活に馴染むことができた。

遠足では１０キロほど歩き、旭山動物園まで行った。途中では風景や友人との写真撮影や会話を楽しみ、動物園ではお気に入りの動物を友達と見ながら、楽しい時間を過ごしていた。

見学旅行は長崎と関西に行った。長崎の平和学習では、真剣に資料を読み、本校生徒とともに、平和への思いを新たにした。特に爆心地に行ったことは、本校生徒だけではなく留学生にとっても衝撃的な経験となった。

関西では日本の文化や歴史を堪能した。清水寺をはじめとする京都の寺社仏閣の作りや荘厳な雰囲気に圧倒されていた。着物を着たり、食を楽しんだりと、友達と有意義で貴重な時間を過ごした。しかしまだまだ足りないらしく、次は大人になってから関西に自分で来て、日本文化をもっと知りたいとも言っていた。

５　本校の留学生について

本校の留学生２名とも、英語力は高くはなく、英語で気持ちや考えを伝えることに相当苦労したようだ。その悔しさをこれからの授業に活かし、語学力だけではなく、コミュニケーション能力を高める努力をしてほしい。今回の留学の意義を振り返り、この経験を将来に活かしてほしい。

平成３０年度北海道・アルバータ州高校生交換留学促進事業報告書

北海道鹿追高等学校　教諭

１　はじめに

本校では毎年鹿追町から多大なる支援を受け、１学年の学校行事の １ つとして９月～１０月に「カナダ短期留学」として２週間カナダを訪れています。現地では、ホームステイや姉妹町の高校などで日本文化紹介として様々な活動を披露したり、現地の方と交流を深めたりする機会があります。また、毎年７月には、姉妹町から訪問団が来町し、ホームステイの受入を募集し多くの家庭に協力いただいております。カナダからの訪問団が来校した際には、授業や学校祭に参加するなど本校の生徒たちは異文化に触れる機会が多くあります。また、道内で行われる JICA のプログラムやイングリッシュ・キャンプなどの短期の国際交流プログラムにも毎年参加する生徒もおり、国際交流に高い関心を持っている生徒が多くいる学校であると感じております。

２　受入準備

本校ではここ数年にわたり、本事業に携わる機会をいただいております。そのため、前任の担当教諭が作成した英語版の学校ガイダンス・ハンドブックが既に完成されており、今年も事前にカナダ生徒と保護者へＥメールで送り、主に制服（正装）、略装（白色ポロシャツ）、運動靴、上履きなどについて何度かやりとりをしました。制服は本人のサイズに合うものを事前に準備しておき、登校日初日から制服で登校することができました。夏服として許可されている白いポロシャツはカナダで見つけることができず、到着後の週末にホスト家庭と一緒に購入してもらいました。上履きは、私の説明が悪かったためか、上履きというコンセプトをよく理解しておらず、急遽、日本のホスト家庭に準備をしていただきました。今年は夏休み明けの日が初登校日となり、全校集会で英語・日本語で挨拶できるようにパートナー生徒やホスト家庭に日本語指導してもらうなど、様々な場面で協力してもらい無事留学生の登校がスタートしました。

３　授業について

本校は各学年２クラスの規模の学校ですが、授業はコース制を導入しており、特別進学コース・国際教養コース・情報ビジネスコースという３つのコースに分かれて授業を展開しています。到着後の一週目は基本的にパートナー生徒と同じ２学年の国際教養コースの授業を受け、その後、本人の希望で自分の興味・関心に合う授業に行くようになっていきました。担当教員の英語の授業にも参加してもらい、時には英語の手本になってもらったり、一緒に問題を解いたり、生徒たちが英語を練習している間、日本語の訳を読んで理解するなど英語の授業にも積極的にかかわってくれました。その中で、特に生徒たちが最も刺激を受けたのは留学生による日本語での自国の文化や学校紹介のプレゼンテーションでした。スライドは考査期間中に留学生が自ら作り、テスト明けに発表の時間をつくりました。日本語で立派に発表する姿に感動し、「自分たちももっと英語を頑張ろう！」という気持ちにさせてくれる素晴らしいプレゼンテーションでした。後半は、本人の希望で、数学や物理、フードなど学年を越え授業に参加していき、自ら交流も広げていきました。日本語のレベ

ルは基本的な日常会話、ひらがなやカタカナなど読み書きもでき、小学生低学年レベルの漢字も少しわかるレベルでした。日本語学習も希望しており、毎日１時間程度、担当教員や空き時間のある教員に協力してもらい日本語指導を行い、日々上達していきました。特に、スピーキング力、リスニング力と作文力が大きく向上したように感じました。留学当初から、日課として日本語で日記を書くことを約束し、毎日、２学年教員が内容を読み、コメントを書き入れるなど２ヶ月間続けることができました。家庭での様子や週末のできことなどもわかり、日本語会話の材料にもなる良い取組だったと感じています。

４　その他の学校や家庭での活動について

日本のホスト家庭には大変良くしていただきました。毎日、バラエティーに富んだ食事を準備してもらったり、一緒にお菓子をつくったりするなど家庭内で積極的にかかわれるように工夫してくれました。週末には、様々なところへ連れて行ってもらったと本人もよく話してくれました。カナダからの留学生はとても素晴らしい生徒ですが、心優しく周囲へ大変気を使う生徒だったため、私たちが本人を気遣う必要がありました。ホスト家庭から様々な情報をもらい、上手くいっていることのみならず改善が必要なことなども含め、気になることなどをお互いに相談し合えたことにも大変感謝しております。

部活動はパートナー生徒が茶道部に所属しており、一緒に週に１度活動していました。日本での生活が慣れてきた頃には、バドミントン部や陸上部などにも参加し、パートナー生徒とは別の活動をして、自ら校内での交流を広げていく姿も見えました。

最終日には、所属する２学年生徒によるサプライズ企画があり、様々なゲームや音楽演奏会で楽しんでもらいました。さらに本人の活動をまとめた写真とビデオメッセージのＤＶＤのプレゼントがありました。本人にとっても、本校の生徒にとっても思い出に残る機会となりました。

５　終わりに

本事業は、カナダへ留学した本校生徒のみならず学校全体に素晴らしい影響を与えます。国際社会を生きていく生徒たちにとって、自分とは異なる文化を持った同世代の生徒と深く関われることは大変意義のあることだと感じます。本校の生徒たちは、カナダ留学生から大きな勇気をもらい、刺激を受けていました。また、本校からカナダへ留学した内気だった生徒が帰国後、授業で積極的に発言することも多くなり、さらに本人の素敵な笑顔も増え、この交換留学プログラムを通じて得た経験が本人の大きな自信につながったと感じております。

本事業を支えてくださった多くの方々に感謝申しあげます。

（北海道教育庁学校教育局高校教育課）

平成 30 年度北海道・アルバータ州高校生交換留学促進事業

―アンケート結果から見える事業効果―

1　参加生徒へのアンケート　　（10 名中）

質問項目	はい	いいえ	割合
英語力の向上を実感できた	１０名	０名	１００％
〈英語力向上を実感した場面〉	・日常で使う生きた英語を使えるようになった。 ・リスニング力が向上した。 ・通っている英会話で日常会話がすんなり応えられるようになり、話も留学に行く前より弾むようになったと感じた。 ・海外ドラマを字幕無しでおおよそ理解できたとき。 ・学校にいる留学生と話すときに英語で話せるようになった。		
国際社会への関心が高まった	８名	２名	８０％
〈具体的に〉	・国際社会はもちろん、まず日本のこと（政治経済など）を知ってから、もっと色々な問題を見ていきたいと思った。 ・いろんな国の友だちができたことでもっと興味を持った。 ・海外の移民問題などについて調べるようになった。		
機会があれば、また留学したい	１０名	０名	１００％
〈理由〉	・今回の留学で自分の英語力の向上を感じたから。新しい視点でのものの見方を知ったから。 ・もっと英語力を高めて他の国の人達とコミュニケーションを取りたいと思ったため。		
経験をどのように活かして行きたいか （複数回答）	・今後の職業選択や進路選択に活かしたい		９名
	・何かの機会に今回の体験を発表してみたい		４名
	・国際交流事業の運営にボランティアとして参加したい		３名

2　保護者へのアンケート　（10 名中）

質問項目	はい	いいえ	割合
どのような点で子供の成長を感じましたか？ （複数回答）	・ 国際的視野の拡大 ９名 ・ 自立性 ７名 ・ 将来に向けた展望 ７名 ・ コミュニケーション能力 ７名 ・ 英語力の向上 ６名		９０％ ７０％ ７０％ ７０％ ６０％
留学生受入によって家族の変化を感じた	８名	２名	８０％
〈意見・感想〉	・お互いに協調し思いやりを持てました。 ・子どものために一生懸命考えることの楽しさを思い出した。 ・以前よりも海外が近く感じるようになりました。家族で色々と作戦を立てて取り組んできたので、特に受け入れ期間を終了した時には達成感を覚えました。		
国際社会に対する関心が高まった	６名	４名	６０％
〈意見・感想〉	・日本の良さも改めて見直したこともありました。地図や本を購入した。		

３　留学生受入校担当教員へのアンケート　（９名中）

質問項目	回　答　結　果		割合
留学生受入による生徒への効果 （複数回答）	・　英語学習の動機付けとなった	８名	８９％
	・　英語に興味を持つ生徒が増えた	７名	７８％
	・　海外を身近に感じている生徒が増えた	６名	６７％
	・　留学に興味を持つ生徒が増えた	６名	６７％
	・　英語力が向上した生徒がいる	３名	３４％
〈意見・感想〉	・良い意味で留学生を特別視せず、必要なサポートをするようになった。多様性を尊重するカナダの考え方や、社会の多様性、分け隔て無く接しようとする姿勢を留学生から学んだ。 ・日本語・英語をお互いに教え合ったりするなど、積極的にコミュニケーションを取ろうとする場面が見られた。		
学校に対する効果	・　留学生受入ノウハウの獲得	７名	７８％
	・　教員間の連携が強まった	４名	４５％
	・　アルバータの文化や習慣を知るきっかけとなった	３名	３４％
	・　学校の特色を深めることができた	２名	２３％
〈意見・感想〉	・学校が国際交流、国際理解教育に力を入れていることを生徒がさらに実感できる機会となった。そういう学校だから、このような機会が得られると言うことも感じたようだ。留学生が来るのが特別なことではないという感覚を持つようになった。 ・どの教室でも留学生を受け入れる体制があった。教員間では日本語教授法が少し身についた。		